他力と言うは如来の本願力なり

藤嶽明信

はじめに……三
第一章　浄土三部経と七祖を通して――本願力および他力について――……四
第一節　「本願力」の用例……五
第二節　「願力」の用例……一九
第三節　「大願業力」の用例……二七
第四節　「他力」の用例……三〇
第五節　本願の念仏による往生道――善導と法然を通して――……三九
第二章　親鸞における他力・本願力の思想……四七
第一節　如来による回向……四七
第二節　如来回向の内実……五〇
第一項　大行・真実行……五〇
第二項　大信・真実信……五三
第三項　往相および還相……六〇
第三節　横超他力……六四
第一項　横超……六四
第二項　本願を憶念して自力の心を離るる――横超他力――……七二
おわりに……七六

凡例

『定本親鸞聖人全集』→『定親全』
『真宗聖教全書』→『真聖全』

はじめに

本論文は、他力についての親鸞の思想を考察しようとするものである。親鸞の思想は、

しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に閲して、仏恩の深遠なるを信知して、正信念仏偈を作りて曰わく、

（『定親全』一・八五頁、『真宗聖典』二〇三頁）

と述べられるように、釈尊（大聖）の真実の言葉と七祖（大祖）の解釈に導かれることによって生まれている。釈尊の教えは仏による説として、人による言説と並列させることができない決定的な位置を占める。しかし釈尊の仏説は、それを自身の救いの教えとして聞き取った七祖の領解によって、その深意が明らかにされていったのである。そのような法然等の七祖の導きによって、親鸞は仏説の真意を信知することができたのである。釈尊（大聖）の真言と七祖（大祖）の解釈に導かれるというのが、親鸞による仏道の学び方である。このような親鸞の学び方は『教行信証』「信巻」には、

ここに愚禿釈の親鸞、諸仏如来の真説に信順して、論家・釈家の宗義を披閲す。広く三経の光沢を蒙りて、特に一心の華文を開く。しばらく疑問を至してついに明証を出だす。誠に仏恩の深重なるを念じて、人倫の哢言を恥じず。

（『定親全』一・九五頁、『真宗聖典』二一〇頁）

と述べられている。また『教行信証』「総序」には、

誠なるかなや、摂取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ。ここに愚禿釈の親鸞、慶

ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。ここをもって、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。

（『定親全』一・七頁、『真宗聖典』一五〇頁）

と述べられている。よって本論文においても、親鸞の思想の背景としてある浄土三部経や七祖の教えを踏まえながら、親鸞における他力の思想を考察していく。

第一章　浄土三部経と七祖を通して――本願力および他力について――

他力について親鸞は『教行信証』「行巻」で、

他力と言うは、如来の本願力なり。

（『定親全』一・七一頁、『真宗聖典』一九三頁）

と述べている。ここに述べられている「他力」および「如来の本願力」という用語が、本論文全体を通しての重要語句である。そこでまず「他力」と「本願力」という用語の浄土三部経および七祖における用例を見る。浄土三部経に「他力」という用語は使用されてはいないが、「本願力」等の用語によって他力の思想は説かれている。また七祖においては「本願力」や「他力」という用語によって阿弥陀仏のはたらき・力用が表されている。よって、まず浄土三部経および七祖における「本願力」等の用例を見、次いで「他力」の用例を見ることにする。

第一節　「本願力」の用例

【浄土三部経】正依の三部経のなかでは『大無量寿経』に「本願力」「本願の力」という用語が説かれる。『大無量寿経』上巻には、

阿難、若し彼の国の人天、此の樹を見る者は、三法忍を得。一つには音響忍、二つには柔順忍、三つには無生法忍なり。此れ皆、無量寿仏の威神力の故に、本願力の故に、満足願の故に、明了願の故に、堅固願の故に、究竟願の故なり。

（『真聖全』一・一九頁）

と説かれている。これは『大経』上巻で阿弥陀の浄土の徳が説かれるなかで、道場樹の勝れた徳を明かす箇所である。浄土の人天で道場樹を見るものは必ず三法忍（音響忍、柔順忍、無生法忍）を得ることができる。このような法忍を得ることができるのは、全く無量寿仏の威神力・本願力・満足願・明了願・堅固願・究竟願のはたらきによるからである。以上のように、阿弥陀の浄土において三法忍の利益が得られる根拠は、本願力などの阿弥陀の勝れたはたらきによるものであることが説かれている。

『大無量寿経』下巻には、

其の仏の本願力、名を聞きて往生せんと欲えば、皆悉く彼の国に到りて、自ずから不退転に致る。

（『真聖全』一・二六頁）

と説かれている。これは「東方偈（往覲偈）」の文である。この文は、諸仏が自国の菩薩たちに無量寿仏を観ることを勧める言葉のなかにある。無量寿仏の本願の力用によって、仏の名を聞いて往生を願うもの、皆彼の国に

往き、おのずから不退転の位に至ると述べられている。本願力に関して『大経』の二文中、前者は浄土において得られる利益の根拠として説かれ、後者は聞名において往生せしめ不退転に至らしめる力用として説かれている。

これらの『大無量寿経』の二文は『教行信証』に引用されている。前者は「化身土巻」（『定親全』一・二七一頁、『真宗聖典』三二七～八頁）に方便化身土の証文として引用されている。後者は「行巻」（『定親全』一・一八頁、『真宗聖典』一五八頁）に引用されている。聞名において往生せしめ不退転に至らしめる、真実行・大行の力用を顕すものとして示されている。元々が「東方偈（往覲偈）」のなかの文であり、さらには親鸞が諸仏称名の願に基づく大行を顕す「行巻」所引であることを踏まえるならば、諸仏の讃嘆を通して阿弥陀の本願力が顕されている文として了解してよいであろう。『観経』と『阿弥陀経』には「本願力」の用例はない。

【七祖】以下七祖における「本願力」という語の用例を『真聖全』第一巻所収の聖教によって取り上げる。

【龍樹】龍樹は『十住毘婆沙論』「易行品」において本願力という語を二箇所用いている。まず「十方十仏章」には、

> 宝月、其の仏の本願力の故に、若し他方の衆生有りて、先仏の所に於て諸の善根を種えんに、是の仏但光明を以て身に触れたまうに即ち無生法忍を得ん。
>
> （『真聖全』一・二五五頁）

と述べられている。この文は、菩薩が不退転に至り仏果を成就しようと欲するならば、十方の諸仏を念じてその名号を称えることを勧めており、そこに引用される『宝月童子所問経』の文である。ここでの本願力は、無憂と

いう世界の善徳という仏について説かれているものであり、阿弥陀仏の本願力を指すものではない。しかし、

余の九仏の事皆亦是の如し。

（『真聖全』一・二五五～六頁）

と述べられるように、善徳仏は十方十仏の代表として取り上げられているのであり、他の九仏も同様であり、十方十仏に共通して勝れた本願力の力用があることを述べたものである。

二例目は「弥陀章」に、

若し人仏に作らんと願じて　心に阿弥陀を念ずれば　時に応じて為に身を現さん　是の故に我彼の仏の本願力を帰命す

（『真聖全』一・二六〇頁）

と述べられている。これは「若人願作仏　心念阿弥陀　応時為現身　是故我帰命　彼仏本願力　十方諸菩薩　来供養聴法　是故我稽首」という偈の文である。親鸞は『教行信証』「行巻」（『定親全』一・三一頁、『真宗聖典』一六六頁）に引用し、四句を一行とするのではなく独自の訓読をしている。『真聖全』の訓点等もそれに準じたものになっている。文意は次のようになる。もし人が仏になろうと願って、心に阿弥陀仏を念じれば、それに応じて阿弥陀仏はその人の前に現れてくださる。だから私は阿弥陀仏の本願に帰命するのである。親鸞の訓読によって、阿弥陀仏の本願力は念ずる人に阿弥陀が現れる力用として述べられていることになる。

また本願力の「力」の文字は付いていないが、本願に関して着目すべき文として「弥陀章」に、

是の諸の仏世尊現在十方の清浄世界に、皆名を称し阿弥陀仏の本願を憶念すること是の如し。若し人我を念じ名を称して自ら帰すれば、即ち必定に入りて阿耨多羅三藐三菩提を得。是の故に常に応に憶念すべし。

（『真聖全』一・二五九頁）

と述べられている。この文は『教行信証』「行巻」（『定親全』一・三〇～一頁、『真宗聖典』一六五～六頁）に引用され、ここでも親鸞独自の訓読がなされている。『真聖全』の訓点等もそれに準じたものになっている。文意は次のようになる。これらの諸仏・世尊は現に十方の清浄な世界において、みな（阿弥陀仏の）名を称え、阿弥陀仏の本願を憶念されていることは是の如くである。もし人が我（阿弥陀仏）の名を称え帰命するならば、ただちに必定の位に入り、この上ないさとりを得るのである。だから常に阿弥陀仏を憶念するがよい。親鸞の訓読は、諸仏と阿弥陀との関係を明確にしている。

【天親】天親の『浄土論』において本願力という用語は、偈文（偈頌）には、

仏の本願力を観ずるに、遇いて空しく過ぐる者なし、能く速やかに功徳の大宝海を満足せしむ。（観仏本願力　遇無空過者　能令速満足　功徳大宝海）　（『真聖全』一・二七〇頁）

と述べられている。これは三種（国土、仏、菩薩）の荘厳功徳を述べるなか、仏の荘厳功徳のうちで第八の「不虚作住持功徳」について示されたものである。この偈文を承けて長行（解義分）の「観察体相」には、

何ものか荘厳不虚作住持功徳成就、偈に「観仏本願力　遇無空過者　能令速満足　功徳大宝海」と言えるがゆえに。すなわちかの仏を見たてまつれば、未証浄心の菩薩畢竟じて平等法身を証することを得て、浄心の菩薩と上地のもろもろの菩薩と畢竟じて同じく寂滅平等を得るがゆえに。

（『真聖全』一・二七四頁）（訓読は『真宗聖典』一四一頁を参照した）

と述べられている。また「利行満足」には、

出第五門とは、大慈悲をもって一切苦悩の衆生を観察して、応化の身を示して、生死の園、煩悩の林の中に回入して、神通に遊戯し教化地に至る。本願力の回向をもってのゆえに。これを出第五門と名づく。

（『真聖全』一・二七七頁）

と述べられている。

これらの三文のうち、第一文と第二文は「不虚作住持功徳」に関する文である。親鸞は、「不虚作住持功徳」の文を『教行信証』において「行巻」（『定親全』一・三二頁、『真宗聖典』一六七頁）に『浄土論』から引用している。また曇鸞の『浄土論註』を用いて「行巻」（『定親全』一・七九頁、『真宗聖典』一九八頁）や「真仏土巻」（『定親全』一・二五四頁、『真宗聖典』三一六頁）に引用している。その他の著作（『浄土文類聚鈔』『入出二門偈』『尊号真像銘文』『一念多念文意』『高僧和讃』など）においても引用や解説をしている。

第一文の文意は次のようである。阿弥陀仏の本願の力用に出遇うならば、空しく迷いの生死を繰り返すものはない。速やかに大きな宝の海のような功徳を満足させてくださるのである。この文について親鸞は、先述したように『尊号真像銘文』『一念多念文意』において詳しく解説をしている。第二文は偈頌とそれに対する解義とから構成されている。親鸞は『浄土論註』の示唆を承けて、解義分の文（「すなわちかの仏を見たてまつれば、未証浄心の菩薩畢竟じて平等法身を証することを得て、浄心の菩薩と上地のもろもろの菩薩と畢竟じて同じく寂滅平等を得るがゆえに」）を還相回向の証文と位置付けて、『浄土論註』を用いて『教行信証』「証巻」（『定親全』一・二〇二頁、『真宗聖典』二八六頁）に引用している。

第三文には出第五門が述べられている。『浄土論』は五念門と五功徳門を通して大乗の菩薩道を述べていると

いう観点に立つならば、「本願力の回向」の「本願力」も「回向」も菩薩道を歩む菩薩における事柄を指すものであると言えよう。しかし親鸞は曇鸞の『浄土論註』の了解などを踏まえて『入出二門偈』に、

かの如来の本願力を観ずるに、凡愚遇うて空しく過ぐる者なし。一心に専念すれば速やかに、真実功徳の大宝海を満足せしむ。菩薩は五種の門を入出して、自利利他の行、成就したまえり。不可思議兆載劫に、漸次に五種の門を成就したまえり。

（『定親全』三・一一四～五頁、『真宗聖典』四六一頁）

と述べている。すなわち『浄土論』を凡愚・凡夫の願生道を明かすものとして了解している。それゆえに五念門行も、阿弥陀仏の因位である法蔵菩薩による不可思議兆載（永）劫の修行として示されている。したがって第三文の「本願力の回向」の「本願力」と「回向」とは、阿弥陀仏の本願の力用による回向を意味するのである。親鸞による独自で深い読解が窺われる。

【曇鸞】曇鸞の『浄土論註』には「本願力」の語が多く見られる。よって親鸞が『教行信証』に引用する箇所に着目して取り上げることにする。

まず下巻の「観察体相章」に、

何者か荘厳不虚作住持功徳成就、偈に観仏本願力遇无空過者能令速満足功徳大宝海と言へるが故にと。「不虚作住持功徳成就」は、盖し是阿弥陀如来の本願力なり。…（中略）…言う所の不虚作住持は、本と法蔵菩薩の四十八願と、今日の阿弥陀如来の自在神力とに依るなり。願以て力を成ず、力以て願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず、力願相荷うて畢竟じて差はざるが故に成就と曰う。

（『真聖全』一・三三一頁）

と述べられている。この文を親鸞は『教行信証』「真仏土巻」（『真宗聖典』三一六頁）に引用している。この文は、法蔵菩薩の本願と阿弥陀仏の自在神力という、因と果のはたらきによって「不虚作住持功徳成就」を明らかにしている。

次に下巻の「善巧摂化章」に、

是の故に彼の安楽浄土に生と願ずるは、要ず无上菩提心を発するなり。若し人无上菩提心を発さずして、但彼の国土の楽を受こと間无きを聞て、楽の為の故に生を願ずるは亦当に往生を得ざるべき。是の故に「自身住持の楽を求めず一切衆生の苦を抜かんと欲う」と言うが故にと。「住持楽」というは、謂く彼の安楽浄土は、阿弥陀如来の本願力の為に住持せられて受楽間无き。（『真聖全』一・三三九～四〇頁）

と述べられている。この文意は次のようである。阿弥陀仏の浄土への往生を願う人は、必ず無上菩提心を発さなければならない。ただ極楽の楽しいことだけを聞いて、楽しみのためだけに往生を願うのであれば、往生はできないのである。だから『浄土論』には、自分自身のためのに住持の安楽（たもたれた安楽）を求めるのではなく、全ての衆生の苦を抜こうと思う、と述べられている。住持の安楽とは、浄土は阿弥陀仏の本願の力用によって変化することもなくたもたれており、絶え間なく楽しみを受けることができるということである。この文のなかで本願力について、浄土において変化することがない楽がたもたれているのは、阿弥陀仏の本願力によるものであると述べられている。この文は前後を含め、『教行信証』「信巻」（『真宗聖典』二三七頁）の菩提心釈の証文として引用されている。

次は下巻の「利行満足章」に、

「本願力」とは、大菩薩法身の中に於て常に三昧に在して種種の身・種種の神通・種種の説法を現ずることを示す。皆本願力を以て起すなり。譬ば阿修羅の琴の鼓する者の无と雖も音曲自然なるが如し。是を教化地の第五の功徳相と名く。

（『真聖全』一・三四五頁）

と述べられている。先に取り上げた天親の『浄土論』の出第五門について曇鸞が註釈した文である。文意は次のようである。本願の力用とは、大菩薩が法身のさとりにおいて、常に禅定にありながら、さまざまな応化身や神通力を現し、さまざまな説法をなされることをいう。これらはみな本願の力用から起こったものである。たとえば阿修羅の琴は弾くものがいなくても自然に音曲を奏でるようなものである。これが衆生を教え導く第五門の功徳の相だというのである。親鸞はこの文に続く文も含めて、『教行信証』「行巻」（『真宗聖典』一九三頁）に他力・本願力を明かす証文として引用している。文中にある大菩薩とは、親鸞においては法蔵菩薩を意味する。

次は下巻の「利行満足章」に、

凡そ是れ彼の浄土に生と及び彼の菩薩人天の所起の諸行は皆阿弥陀如来の本願力に縁るが故なり。何を以て之を言うとなれば、若し仏力に非ずば四十八願便ち是れ徒設ならん。今的しく三願を取て用て義の意を証せん。

（『真聖全』一・三四七～八頁）

と述べられている。この文は『教行信証』「行巻」（『真宗聖典』一九四頁）に引用され、衆生が速やかに仏のさとりを得るのは仏力によることを明かす証文として引用されている。そこには、衆生が浄土に往生することも、往生してからさまざまなはたらきを現すことも、全て阿弥陀仏の本願力によると述べられている。

また先述したように、『浄土論』において「不虚作住持功徳」の偈頌に対する解義の文は、『教行信証』「証巻」

に還相回向の証文として引用されている。そしてこの『浄土論』の解義の文に対する曇鸞の註釈を含め『浄土論註』下巻の文が、「証巻」に還相回向の証文として長文で引用されている。

また「本願力」の語は『讃阿弥陀仏偈』では、

南無して心を至し帰命して西方の阿弥陀仏を礼したてまつる。妙土広大にして数限を超ゆ　自然の七宝もて合成せ所れたり　仏の本願力の荘厳より起る　清浄大摂受を稽首したてまつる。願わくは諸の衆生と共に安楽国に往生せん。

（『真聖全』一・三六〇～一頁）

と述べられている。文意は、心から帰依して西方の阿弥陀仏を礼拝する。阿弥陀仏の浄土は広大であって数量を超えており、自然の七宝でできており、それは阿弥陀の本願力によって荘厳されたのである。清浄で一切衆生を摂取する如来を稽首したてまつる。このような意味である。

また『略論安楽浄土義』「荘厳数量」には、

衆生世間清浄に十二種の荘厳成就有り。一には无量の大珍宝王微妙の華台を以て仏座と為す。…（中略）…八には仏の本願力もて諸の功徳を荘厳し住持す、遇う者は空しく過ぐること无し、能く速に一切の功徳海を満足せしむ、諸の浄心の菩薩と与に畢竟じて平等法身を証することを得、浄心の菩薩と上地菩薩と畢竟じて同じく寂滅平等を得。…（後略）…

（『真聖全』一・三六八頁）

と述べられている。十二種の衆生世間清浄の荘厳成就を述べるなかの第八種目に本願力の語が用いられている。文は『浄土論』の「不虚作住持功徳」の偈頌と解義の記述内容に随いながら述べられている。

【道綽】道綽の『安楽集』において本願力の語は「第一大門」に、

是の故に天親の『論』（浄土論）に云く。「彼の世界の相を観ずるに、三界の道に勝過せり、究竟して虚空の如し、広大にして辺際無し」と。是の故に『大経の讃』（讃弥陀偈）に云く。「妙土広大にして数限を超ゆ、自然の七宝もて合成せ所れたり、仏の本願力の荘厳より起る、清浄大摂受を稽首したてまつる。世界の光耀妙にして殊絶す、適悦晏安として四時無し、自利利他の力円満したまう、方便巧荘厳に帰命したてまつる」と。

（『真聖全』一・三八八頁）

と述べられている。この箇所では、阿弥陀の浄土は三界のなかにおさまるのではなく、三界を超えた世界であることが明かされている。そこに天親の『浄土論』と曇鸞の『讃阿弥陀仏偈』が引用されている。『讃阿弥陀仏偈』の文意は先に見た通りである。これらの引文を通して、阿弥陀の浄土は三界を超えた勝れた世界であり、それは阿弥陀の本願力によって荘厳されたものであると述べられている。続く文は、阿弥陀の世界の光のかがやきは殊に妙え勝れており、心身が快く安らかで四季の別がなく、自利利他のはたらきが円満している、衆生を導く巧みなはたらきの荘厳に帰命する。このような意味である。

【善導】次に善導の著述における「本願力」の語の用例を見る。『法事讃』下巻の「転経分」には、

凡夫疑見の執を断ぜんが為に、皆舌相を舒べて三千に覆ひて、共に七日名号を称することを証し、又釈迦の言説の真なることを表す。終時に正意にして弥陀を念ずれば、仏の慈光の来りて身照らすを見る。此の弥陀の本願力に乗じて、一念の間に宝堂に入る。

（『真聖全』一・五九八頁）

と述べられている。『法事讃』「転経分」においては、『阿弥陀経』が十七段落に分けられて讃嘆の文が付されている。『阿弥陀経』の「六方段」は、阿弥陀仏の不可思議の功徳を六方の諸仏が証讃するところである。「六方段」の第一は東方の諸仏による証讃である。この経文に対して善導が付した讃文の一部を上に引用した。文意は以下の通りである。凡夫の疑いのとらわれを断つために、諸仏は三千世界を舌で覆って、七日間名号を称することの功徳を証明し、また釈尊の説法は真実であることを表す。衆生は命終時に心が乱れることなく阿弥陀仏を念ずれば、仏の慈光が来たってその人を照らすのを見る。この阿弥陀仏の本願力に乗託して、わずかな間に浄土の宝堂に入るのである。この箇所で本願力は、衆生を浄土に往生せしめる力用として述べられている。

また『観念法門』の「五種増上縁」には、

又下の願に云うが如し。（大経巻上意）「設ひ我仏を得んに、十方世界に、其れ女人有りて、我が名字を聞きて、歓喜信楽し、菩提心を発して、女身を厭悪せん。命終の後、復女身と為らば、正覚を取らじ」と。義に曰く。乃ち弥陀の本願力に由るが故に、女人仏の名号を称すれば、正しく命終の時、即ち女身を転じて男子と成ることを得。弥陀手を接し菩薩身を扶けて宝華の上に坐せしむ。仏に随ひて往生し、仏の大会に入りて無生を証悟す。

（『真聖全』一・六三七頁）

と述べられている。これは五種の増上縁のなかの「摂生増上縁」を述べる箇所の文である。『大経』の女人往生の願が示されて、その意味が述べられている。文意は以下の通りである。阿弥陀仏の本願力によって、女人が称名すれば男子に転成し、阿弥陀は手をとり、菩薩たちは身をたすけて宝華の上に坐らせる。仏に随って浄土に往生し、仏の説法の会座に加わって無生をさとる。ここで本願力は、女人を浄土に往生せしめる力用として述べら

れている。

また「本願の力」という訓読は『般舟讃』「正讃」に、

普く勧む有縁の道俗等　願往生　会ず是専心にして仏教を行ぜよ　無量楽
念仏し専心に誦経し観じ　願往生　荘厳を礼讃して雑乱すること無かれ　無量楽
行住坐臥心相続すれば　願往生　極楽の荘厳自然に見はる　無量楽
或は想或は観罪障を除く　願往生　皆是弥陀本願の力なり　無量楽

（『真聖全』一・七〇一頁）

と述べられている。『般舟讃』「正讃」では、浄土および阿弥陀仏の荘厳功徳が讃嘆され、また九品の往生の相が讃えられている。引文の文意は次の通りである。あまねく縁ある僧俗等に勧める、必ず心を専らにして仏の教えを行ぜよ、心を専らにして念仏し経を誦し観察せよ、浄土の荘厳を礼拝讃嘆して乱れることなかれ、行住坐臥に心が相続すれば、浄土の荘厳は自然に見られる、憶想や観察して罪障を除くことは、これはみな阿弥陀仏の本願力によるのである。この箇所で本願力は、憶想や観察によって罪障が除かれる根拠として述べられている。

【源信】次に源信の『往生要集』での用例を見たい。本願力の語は『往生要集』巻上末「第三　極楽証拠」に、

仏の誠慇懃なり、唯応に仰いで信ずべし。況や復機縁無きに非ず、何ぞ強ひて之を拒まんや。天台の『十疑』（意）に云うが如し。「阿弥陀仏は、別に大悲の四十八願有りて、衆生を接引したまう。又彼の仏の光明は、遍く法界の念仏の衆生を照らして、摂取して捨てたまはず。十方に各々恒河沙の諸仏舌を舒べて三千界を覆ひ、一切衆生の阿弥陀仏を念じ、仏の大悲本願力に乗ずれば、決定して極楽世界に生ずることを得るこ

とを証成したまうなり。又無量寿経に云く。末後法滅の時、特に此の経を留めて百年世に在らしめ衆生を接引して彼の国土に生ぜしめんと。故に知んぬ、阿弥陀仏と、此の世界の極悪の衆生とは、偏に因縁有りということを」と。已上

（『真聖全』一・七七六頁）

と述べられている。ここでは十方に浄土があるのに何故極楽に往生することだけを願うのかという問いに答えている。天台智顗の『十疑論』を引用して、阿弥陀仏とこの娑婆世界の極悪の衆生とには深い因縁があることが述べられている。衆生が阿弥陀仏を念じて大悲の本願力に乗託すれば、必ず極楽に往生すると十方の諸仏は証明している。この箇所で本願力は、衆生を必ず往生せしめる力用として述べられている。

また『往生要集』巻下本「第七　念仏利益」では、

『双巻経』（大経巻下）の偈に云く。「其の仏の本願力、名を聞きて往生せんと欲へば、皆悉く彼の国に到りて、自ら不退転に致る」と。

（『真聖全』一・八七三頁）

と述べられている。ここには行者に心を決定させるために弥陀の別益が述べられている。引用されている『大経』の文意は先述した通りである。この箇所で本願力は、名を聞いて往生を願う者を往生せしめ、不退転の位に至らしめる力用として述べられている。

【法然】次に法然の用例を見たい。『選択集』には「本願力」や「本願の力」という語は用いられてはいない。しかし『選択集』には、「選択本願念仏」「弥陀の本願」「本願の行」「本願の義」「本願と相応」「往生の本願」「仏の本願の意」「念仏往生の本願」「本願念仏の行」「本願の念仏」「本願に乗じて」「選択本願」など、本願に関わ

る用語が多く用いられている。

【補足】また本願力という語の引用例に関して、七祖以外ではあるが『教行信証』「行巻」には、

また云わく、本願力故というは、すなわち往くこと誓願の力なり。満足願故というは、願として欠くることなきがゆえに。明了願故というは、これを求むるに虚しからざるがゆえに。堅固願故というは、縁として壊ることあたわざるがゆえに。究竟願故というは、必ず果し遂ぐるがゆえに。

（『定親全』一・五六～七頁、『真宗聖典』一八三頁）

と、憬興の『述文讃』が引用されている。ここには本願力が、衆生を往生せしめる誓願の力用として解説されている。

また『浄土論註』からの引用文として「真仏土巻」には、

また云わく、問うて曰わく、「法蔵菩薩の本願力および龍樹菩薩の所讃を尋ぬるに、みなかの国に声聞衆多なるをもって奇とするに似たり、これ何の義あるや。」答えて曰わく、「声聞は実際をもって証とす。計るに更によく仏道の根芽を生ずべからず。しかるを仏、本願の不可思議の神力をもって、摂して彼に生ぜしむるに、必ず当にまた神力をもってそれをして無上道心を生ぜしむべし。

（『定親全』一・二五二頁、『真宗聖典』三一五頁）

と述べられている。『真聖全』（一・二九七頁）では「法蔵菩薩の本願および」とあるが、「真仏土巻」では「力」の語が付加され、法蔵菩薩の本願の力用をより強調した表現になっている。

第二節　「願力」の用例

「本願力」に関して次に「願力」という語の用例を見る。

【浄土三部経】正依の浄土三部経において、『大経』上巻には、

三垢の障を滅し、諸の神通に遊ぶ。因力・縁力・意力・願力・方便の力、常力・善力・定力・慧力・多聞の力、施・戒・忍辱・精進・禅定・智慧の力、正念・正観・諸通明の力、法の如く諸の衆生を調伏する力、是の如きらの力、一切具足せり。

（『真聖全』一・三〇頁）

と説かれている。ここには浄土に往生した者が自利利他の二徳を具することが説かれるが、引用した箇所では利他のなかで特に説法の徳について説かれている。文意は次の通りである。浄土の菩薩たちは三毒の煩悩を滅し、さまざまな神通を自在に用いて遊化する。すなわちさまざまな自利利他の力（因力・縁力・意力・願力・方便の力、常力・善力・定力・慧力・多聞の力、施・戒・忍辱・精進・禅定・智慧の力、正念・正観・諸通明の力、法の如く諸の衆生を調伏する力）を具えている。ここに述べられている「願力」とは、浄土の菩薩が自身の成仏と衆生救済を願う誓願力のことである。それゆえに阿弥陀仏の願力ではなく、浄土の菩薩自身の誓願力を意味している。

また『観経』には、

此の如き妙華は、是本、法蔵比丘の願力の所成なり。若し彼の仏を念ぜんと欲わん者は、当に先ず此の華座の想を作すべし。

（『真聖全』一・五五頁）

と説かれている。これは定善十三観のなかの第七「華座観」の文である。阿弥陀の仏座である華座は法蔵比丘の誓願の力用によって成就されたものであり、阿弥陀仏を心に念じようとするなら、まずこの蓮の台座を想念せよ、と説かれている。華座とは、正しく阿弥陀仏がおられるところである。その華座は、全ての衆生の救済を願う大悲の誓願力によって成就されたものである。ここでは大悲の華座を成就せしめた力用として願力が説かれている。

同じく『観経』には、

若し心を至して西方に生ぜんと欲わん者は、先ず当に一つの丈六の像の池水の上に在ますを観ずべし。先の所説の如き、無量寿仏は身量無辺にして、是凡夫の心力の及ぶ所に非ず。然に彼の如来の宿願力の故に、憶想すること有る者は、必ず成就することを得しむ。（『真聖全』一・六〇頁）

と説かれている。これは定善十三観のなかの第十三「雑想観」のなかの文である。ここには「宿願力」という語が述べられている。文意は次の通りである。もし心から西方の浄土に往生したいと思う者は、まず一丈六尺の無量寿仏の像が浄土の池水の上にましますと観想するがよい。先にも説いたように、無量寿仏の身の大きさははかりしれないほどであるから、凡夫の力ではとうてい想いの及ぶものではない。しかし、無量寿仏が菩薩のときに発された誓願の力用によって、よく心を凝らして観想する者は、必ずその仏のすがたを見ることができる。ここでは観想において無量寿仏を見ることを得させる力用として宿願力・願力が説かれている。

【七祖】続いて七祖における「願力」という語の用例を見てみたい。七祖においては、龍樹・曇鸞・道綽・善導・源信・源空によって願力の語が用いられている。もちろん天親は「本願力」の語を用いて「不虚作住持功

徳」を表し、重要な示唆を与えているが、これについては先述した。その他の祖師の「願力」に関する用例としては、願力、仏願力、法蔵願力、仏の願力、弥陀願力、比丘願力、彼の願力、悲願力、弥陀の願力、三念願力、大誓願力、三種の願力、我が願力、名願力、法蔵比丘の願力、宿願力、大悲願力などの語が述べられている。龍樹・曇鸞・道綽・善導・源信・源空による用例は全体としては数多くあるので、『教行信証』に引用されている文に着目して、曇鸞と善導による「願力」の語の用例を取り上げる。

【曇鸞】曇鸞の『浄土論註』上巻の「浄土論大綱」には、

易行道は、謂く但信仏の因縁を以て浄土に生と願ず。仏願力に乗じて便ち彼の清浄の土に往生を得。仏力住持して即ち大乗正定の聚に入る、正定は即ち是阿毗跋致なり。譬ば水路に船に乗ずれば則ち楽が如し。

（『真聖全』一・二七九頁）

と述べられている。易行道とは、ただ仏を信じて浄土往生を願えば、仏の本願の力用によって清浄な国土に生まれ、仏の力用にたもたれて、ただちに大乗の正定聚に入ることができることをいう。正定聚とはすなわち不退転の位である。これを喩えて言えば、水路を船で行くのは楽しいようなものである。ここでは「仏願力」の語が用いられ、衆生を清浄の国土に往生せしめる力用として述べられている。この文は「行巻」（『定親全』一・三三頁、『真宗聖典』一六八頁）に引用され、真実行・大行による仏道を顕す証文として引用されている。

同じく『浄土論註』下巻「利行満足章」には、

凡そ是れ彼の浄土に生と及び彼の菩薩人天の所起の諸行は皆阿弥陀如来の本願力に縁るが故なり。何を以て

之を言うとなれば、若し仏力に非ずば四十八願便ち是れ徒設ならん。今的しく三願を取て用て義の意を証せん。願に言たまわく。「設い我れ仏を得んに、十方の衆生、心を至し信楽して我が国に生と欲うて乃至十念せん、若し生を得ずば、正覚を取らじ。唯五逆と誹謗正法とを除く」と。仏願力に縁るが故に十念す、念仏すれば便ち往生を得ん。往生を得るが故に即ち三界輪転の事を勉がる。輪転なきが故に所故に速を得ること一の証なり。願に言たまはく。「設い我れ仏を得んに、国の中の人天、正定聚に住して必ず滅度に至らずば、正覚を取らじ」と。仏願力に縁るが故に正定聚に住す、正定聚に住するが故に必ず滅度に至て諸の廻伏の難无し。故に速やかなることを得る二の証なり。願に言たまわく。「設い我れ仏を得んに、他方仏土の諸の菩薩衆我が国に来生して究竟して必ず一生補処に至らん、其の本願の自在に化する所ありて衆生の為の故に弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱して諸仏の国に遊て菩薩の行を修し十方の諸仏如来を供養し、恒沙无量の衆生を開化して无上正真の道を立せしめんをば除く。常倫に超出し諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん、若し爾ずば正覚を取らじ」と。仏願力に縁るが故に、常倫に超出し諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。常倫に超出し、諸地の行を以ての故に、所以に速を得る三の証なり。斯を以て他力を推するに増上縁と為す、然らざることを得んや。

（『真聖全』一・三四七～八頁）

と述べられる。これは「三願的証」と呼ばれる箇所である。衆生往生の因も果も阿弥陀仏の力用（仏力・他力）によると述べられている。そのことを三願（第十八願・第十一願・第二十二願）を示して明らかにしている。このなかで「仏願力」の語は、第十八願を承けて「仏願力に縁るが故に十念す、念仏すれば便ち往生を得ん」と述べられ、第十一願を承けて「仏願力に縁るが故に正定聚に住す」と述べられ、第二十二願を承けて「仏願力に縁る

が故に、常倫に超出し諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん」と、三度述べられている。往生・住正定聚・普賢の徳の修習ということの全体が、阿弥陀仏の仏願力によるものに他ならないことが述べられている。この文は『教行信証』「行巻」（『定親全』一・七三～五頁、『真宗聖典』一九五頁）に他力を顕す証文として引用されている。往生・住正定聚・普賢の徳の修習という往相・還相の全体が、徹底して阿弥陀仏の本願に基づく仏力・他力によるものであることが顕されている。

【善導】次に善導による「願力」の用例を見たい。善導の著述には多くの用例があるが『教行信証』所引のものを取り上げる。『観経疏』「散善義」には、

「二者深心」。「深心」と言うは、即ち是深信の心なり。亦二種有り。一には決定して深く自身は現に是罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁有ること無しと信ず。二には決定して深く彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生を摂受して、疑無く慮無く、彼の願力に乗じて、定んで往生を得と信ず。

（『真聖全』一・五三四頁）

と述べられている。これは『観経』に説かれる三心（至誠心・深心・回向発願心）のなかの深心についての善導の註釈である。いわゆる機の深信と法の深信が述べられているが、その法の深信のなかで「彼の願力」の語が用いられている。法の深信とは、阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂め取ってくださると、疑いなくためらうことなく、阿弥陀仏の本願の力用に乗託して、必ず往生すると決定的に深く信じる、このような信心のことである。彼の願力とは、衆生を往生せしめる阿弥陀仏の本願の力用である。この文は『教行信証』「信巻」（『定親全』一・一〇三

頁、『真宗聖典』二一五～六頁）に引用されている。機の深信と法の深信とは、共に真実信心の自覚内容を顕わしている。

同じく『観経疏』「散善義」には、

仰いで釈迦発遣して指へて西方に向へたまうことを蒙り、又弥陀の悲心招喚したまうに藉りて、今二尊の意に信順して、水火二河を顧みず、念念に遺るること無く、彼の願力の道に乗じて、捨命已後、彼の国に生ることを得て、仏と相見て慶喜すること何ぞ極まらんと喩うるなり。（『真聖全』一・五四一頁）

と述べられている。これは「二河白道の譬喩」において譬喩の意味を解説する合法段（合喩）の文である。釈迦・弥陀の発遣・招喚の仏意に信順して、二河（貪愛と瞋憎）を心配することなく、ひとすじに往生の念を貫いて、阿弥陀仏の本願の力用に乗託して、命を終えて浄土に往生して阿弥陀仏に見えて大いに慶喜することを喩えたものである。彼の願力の道とは、阿弥陀仏の本願の力用による往生道・仏道のことである。「二河白道の譬喩」は『教行信証』「信巻」（『定親全』一・一一二頁、『真宗聖典』二二一頁）に引用され、真実信心を守護し、外邪異見の人々の非難を防ぐ証文として述べられている。

次に『法事讃』には、

永く譏嫌を絶ち等しくして憂悩無し。人天善悪皆往生を得。彼に到りて殊なること無し、斉同不退なり。何の意か然るとならば、乃し弥陀の因地に、世饒王仏の所にして、位を捨てて家を出づ、即ち悲智の心を起して、広く四十八願を弘めたまうに由てなり。仏願力を以て五逆と十悪と罪滅し生を得しむ。謗法闡提、廻心すれば皆往く。（『真聖全』一・五六七頁）

と述べられている。これは『法事讃』「前行法分」で三宝を召請するなか、阿弥陀仏およびその浄土の讃嘆が述べられている文である。阿弥陀仏の浄土では永久に謗り嫌われるようなことはなく平等であり、憂い悩むことはない。善の者も悪の者も皆往生を得る。浄土に往生すれば皆一味平等のさとりを開き、再び退転することはないのである。どうしてそうなるかというと、阿弥陀仏が因位のときに世自在王仏のもとで王位を捨てて出家し、智慧と慈悲の心を発して、広く四十八願を誓われたからである。この本願の力用によって五逆や十悪の者の罪を滅して往生させてくださるのである。謗法の者や一闡提の者であっても、回心すれば皆往生できるのである。ここで仏願力は、五逆と十悪の者の罪を滅し往生を得させる本願の力用として述べられている。この文は『教行信証』「信巻」（『定親全』一・一九〇～一頁、『真宗聖典』二二六～七頁）に引用され、五逆・十悪・謗法・一闡提の者が阿弥陀仏の願力によって皆往生を得ることができる証文として述べられている。

次に『観念法門』には、

又摂生増上縁と言うは、即ち『無量寿経』（巻上意）の四十八願の中に説くが如し。「仏言はく。若し我成仏せんに、十方の衆生、我国に生ぜんと願じて、我が名字を称せんこと、下十声に至るまで、我が願力に乗じて、若し生れずば、正覚を取らじ」と。此れ即ち是往生を願ずる行人、命終らんと欲する時、願力摂して往生を得しむ。故に摂生増上縁と名く。

（『真聖全』一・六三五～六頁）

と述べられている。これは「五種増上縁」のなかの「摂生増上縁」を述べる文である。文意は次の通りである。第十八願には、名号を称えること、わずか十声の者に至るまで往生せしめようと誓われている。これはすなわち、往生を願う人を本願の力用のなかに摂め取り、命終わるときには往生を得させてくださる、ということなのであ

る。このような力用を摂生増上縁というのである。ここでは「我が願力に乗じて」「願力摂して往生を得しむ」と、願力の語が二度用いられている。両者共に衆生を往生せしめる本願の力用を表している。この文は『教行信証』「行巻」（『定親全』一・四七頁）（『真宗聖典』一七七頁）に引用され、真実行・大行の力用を顕わす証文として述べられている。

次に『往生礼讃』「前序」には、

問て曰く。一切諸仏三身同じく証し、悲智果円かにして亦無二なる無かるべし、方に随ひて一仏を礼念し課称せんに、亦応に生を得べし。何が故ぞ、偏に西方を歎じて、専ら礼念等を勧むる、何の義か有るや。答て曰く。諸仏の所証は平等にして是一なれども、若し願行を以て来し收むるに、因縁無きに非ず。然るに弥陀世尊、本深重の誓願を発して、光明・名号を以て十方を摂化したまう。但使信心をして求念せしむれば、上一形を尽くし下十声・一声等に至るまで、仏願力を以て往生を得易し。是の故に釈迦及以び諸仏、勧めて西方に向うるを別異と為すのみと。

（『真聖全』一・六五一頁）

と述べられている。ここには問答が設けられている。全ての仏がたは三身（法身・報身・応身）のさとりの身を得られ、慈悲と智慧の果を円満しておられて、違いがないはずである。そうであるのに、もっぱら阿弥陀一仏への礼拝や憶念を勧める理由を問うている。その問いに対して、仏がたのさとりの果は平等でひとつであるけれども、もし因位の願・行をもって考えると、それぞれの因縁に違いがないわけではないと答え、阿弥陀仏の因位とその成就について述べられている。阿弥陀仏は法蔵菩薩であった因位のときに、深重の誓願を発し、これを成就して、光明と名号とによって全ての世界の衆生を導いて摂め取られるのである。衆生においてはただ信心におい

て、生涯に亘って念仏する者からわずか十声・一声の者に至るまで、本願の力用によって皆たやすく往生することができるのである。そうであるから釈尊や諸仏がたは、西方浄土に向かうことを勧められるのであり、このような特別の違いがあるのである。ここで仏願力は、生涯に亘って念仏する者からわずか十声・一声の者に至るまで往生せしめる本願の力用として述べられている。この文は『教行信証』「行巻」（『定親全』一・四三頁、『真宗聖典』一七四頁）に引用され、真実行・大行の力用を顕わす証文として示されている。

以上、『教行信証』所引という点に着眼して、曇鸞と善導による「願力」の語の用例を取り上げた。

【補足】なお願力という語の引用例に関して、七祖以外ではあるが、『教行信証』「行巻」に法照の『浄土五会念仏略法事儀讃』が引用されて、

しかるに念仏三昧は、これ真の無上深妙の門なり。弥陀法王四十八願の名号をもって、ここに仏、願力を事として衆生を度したまう。乃至　（『定親全』一・四九頁、『真宗聖典』一七八頁）

と述べられている。ここで願力は、衆生を救済する本願の力用・はたらきとして述べられている。

第三節　「大願業力」の用例

次に「本願力」に関連して「大願業力」の用例を見ることにする。浄土三部経には「大願業力」の用例はないので、七祖の用例を見る。その際には『教行信証』に引用されているものを中心に取り上げることにする。

【曇鸞】曇鸞の『浄土論註』下巻の「観察体相章」には、

此の中の仏土不可思議に二種の力有り。一には業力、謂く法蔵菩薩の出世の善根と、大願業力との所成なり。二には正覚の阿弥陀法王善住持力に摂せられたり。※此の不可思議は下の十七種の如し。一一の相皆不可思議なり。文に至て当に釈すべし。（『真聖全』一・三一七頁）（※印は筆者）

と述べられている。天親の『浄土論』のなかに述べられている浄土の不可思議力について、曇鸞は二種あると示している。その一つは業力である。これは因位の法蔵菩薩の無漏の善根と大願業力とによって仏国土が成就していることである。二つには正覚を成就された阿弥陀如来の力用によって仏国土がよくたもたれていることである。この不可思議の力用は天親によって国土十七種荘厳として述べられていて、その一一の相は皆不可思議であり、一一の文を取り上げるところで解説をすると曇鸞は述べている。ここで述べられる大願業力とは、法蔵菩薩の大いなる本願にもとづく業の力用のことである。因位と果位の力用は離れてあるものではない。しかしここでは正覚の阿弥陀法王善住持力に対して大願業力が示されており、大願業力は殊に因位における力用を意味している。この文の「※」印以前を親鸞は『教行信証』「真仏土巻」（『定親全』一・二五三頁、『真宗聖典』三一五～六頁）に引用し、真仏土を顕す証文として示している。

【道綽】道綽の『安楽集』「第三大門」には、

此に在りて心を起し行を立て浄土に生れんと願ず、此は是自力なり。命終の時に臨みて阿弥陀如来光台迎接して遂に往生を得るを即ち他力と為す。故に『大経』（巻上意）に云く。「十方の人天、我国に生ぜんと欲は

ん者は皆阿弥陀如来の大願業力を以て増上縁と為さざるは莫し」と。若し是くのごとくならずば四十八願便ち是徒設ならん。後の学者に語る、既に他力の乗ずべき有り、自ら己が分を局りて徒に火宅に在ることを得ざれ。

（『真聖全』一・四〇六頁）

と述べられている。この文は『教行信証』には引用されていないが、「他力」と「大願業力」との用語が述べられているので取り上げておく。ここでは「自力」に対して「他力」が示されている。そしてその「他力」の力用として、十方の人天を阿弥陀の浄土へ往生させる勝れた力用・増上縁である「阿弥陀如来の大願業力」が述べられている。

【善導】次に善導の『観経疏』「玄義分」には、

弘願と言うは、『大経』の説の如し。一切善悪の凡夫が往生を得る者は、皆阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁と為さざること莫し。

（『真聖全』一・四四三頁）

と述べられている。善導は『観経』に明かされる教えを、釈尊による「要門」と阿弥陀仏による「弘願」という二つで確かめている。そしてその弘願とは『大経』に説かれる通りであると示し、一切の善悪の凡夫が往生を得ることができるのは、全て阿弥陀仏の大願業力の勝れた力用によるものであると述べている。大願業力とは、因位と果位に分判する曇鸞の用法および『大経』の説示を踏まえるならば、超世無上の大いなる本願と、その本願にもとづく兆載永劫の修行による無漏清浄業の力用であると了解できるであろう。すなわち本願と修行による力用が大願業力である。その上で一点注意をしておきたい。曇鸞は大願業力の語を法蔵菩薩に関して用いていた。

しかし先述の『安楽集』でも「阿弥陀如来の大願業力」と述べられ、善導も「阿弥陀仏の大願業力」という表現を用いている。道綽も善導も「大願業力」を果位の如来・仏に関して述べている。もちろん因位と果位の力用は別々の事柄ではないが、このように道綽や善導が述べるのは、果位の阿弥陀仏の力用を因位の力用に遡って尋ね入っているように思われる。この文で大願業力は、一切善悪の凡夫に往生を得しめる力用として示されている。この文は『教行信証』「行巻」（『定親全』一・四七頁、『真宗聖典』一七六頁）に引用され、本願に基づく真実行・大行の力用を顕す証文として述べられている。

第四節　「他力」の用例

以上のように取り上げてきた「本願力」「願力」「大願業力」の用例等を踏まえて、これから「他力」の語の用例を見ることにする。

【浄土三部経】「浄土三部経」において「他力」の語は用いられてはいないが、先述したように『大経』には「此れ皆、無量寿仏の威神力の故に、本願力の故に、満足願の故に、明了願の故に、堅固願の故に、究竟願の故なり」（『真聖全』一・一九頁）あるいは「其の仏の本願力、名を聞きて往生せんと欲えば、皆悉く彼の国に到りて、自ずから不退転に致る」（『真聖全』一・二六頁）と説かれている。また『観経』には「此の如き妙華は、是本、法蔵比丘の願力の所成なり」（『真聖全』一・五五頁）あるいは「無量寿仏は身量無辺にして、是凡夫の心力の及ぶ所に非ず。然に彼の如来の宿願力の故に、憶想すること有る者は、必ず成就することを得しむ」（『真聖全』

一・六〇頁）と説かれている。これらは阿弥陀仏による力用であり、仏力・他力を表すものである。

『大経』について親鸞は、

「大無量寿経言」というは、如来の四十八願をときたまえる経なり。

（『定親全』三・四一頁、『真宗聖典』五一二頁）

と『尊号真像銘文』に述べている。また『教行信証』「教巻」に、

ここをもって、如来の本願を説きて、経の宗致とす。すなわち、仏の名号をもって、経の体とするなり。

（『定親全』一・九頁、『真宗聖典』一五二頁）

と述べている。すなわち『大経』は阿弥陀仏の本願を説くことを宗致とする経である。『大経』の教えの中心は本願と本願成就を説くところにあり、親鸞は本願文と本願成就文を『教行信証』の各巻において引用して、『大経』の教えを確かめている。また『観経』と『阿弥陀経』について親鸞は、「顕」の義と「彰隠密」の義で了解している。「顕」の義では自力の修道を励ます教えであるが、「彰隠密」の義においては他力に帰することを勧める教えであると述べている。

【七祖】「他力」の語の用例を七祖の上に見ていきたい。先述したように龍樹の『十住毘婆沙論』「易行品」や天親の『浄土論』に、他力の思想は窺える。しかし「他力」の語は用いられていない。

【曇鸞】七祖のなかで「他力」の語を明示したのは曇鸞である。曇鸞は他力を自力に対する言葉として示してい

る。『浄土論註』上巻「浄土論大綱」には、

一には外道の相　修醫反　善は菩薩の法を乱る、二には声聞は自利にして大慈悲を鄣う、三には悪を顧こと无き人は他の勝徳を破す、四には顚倒の善果能く梵行を壊る、五には唯是自力にして他力の持つ无し。

（『真聖全』一・二七九頁）

と述べられている。ここには五濁の世・無仏の時に阿毗跋致を求めることの困難さが五難として示される。第五難では「自力」と「他力（持）」が対比的に示されるが、それは前の四難を総括するように「唯是自力」とその質を示し、そこには「他力の持つ」ことが欠落していることを明らかにしている。このことによって、阿毗跋致・不退とは自力によっては成立せず、他力によって成就することを曇鸞は示している。この他力の内容について『浄土論註』下巻には他利利他の釈義や三願的証を通して述べられている。先述したように、三願的証においては第十八願に関して（「仏願力に縁るが故に十念す、念仏すれば便ち往生を得ん」）、第十一願に関して（「仏願力に縁るが故に正定聚に住す、正定聚に住するが故に必ず滅度に至て諸の廻伏の難无し」）、第二十二願に関して（「仏願力に縁るが故に、常倫に超出し諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん」）と述べられている。このように仏願力という語をもって本願の力用が示されている。この三願的証を承けて『浄土論註』には、

斯を以て他力を推するに増上縁と為す、然らざることを得んや。

（『真聖全』一・三四七～八頁）

と述べられ、他力の語が用いられている。これは三願的証の総結の文である。衆生往生の因と果とは、全て阿弥陀仏の本願力・他力を増上縁とするものであると述べられている。これに続く文には、

当に復た例を引て自力・他力の相を示すべし。如人の三塗を畏が故に禁戒を受持す、禁戒を受持するが故に

能く禅定を修す。禅定を以ての故に神通を修習す、神通を以ての故に能く四天下に遊ぶ、是の如き等を名て自力と為す。又劣夫の驢に跨りて上らざれども、転輪王の行に従いぬれば、便ち虚空に乗じて四天下に遊ぶこと鄣碍する所无きが如し、是の如き等を名づけて他力と為す。（『真聖全』一・三四八頁）

と述べられている。ここには自力と他力の特相が、自力と他力の類例を引いて示されている。自力の特相とは、戒学・定学・慧学のように、自らの力によって次第階級を経て進むものである。それに対して他力の特相とは、驢馬に乗ることができないほどの能力の劣った劣夫でも、転輪聖王の行幸に随えば、空中に昇ってあらゆる世界へ行くのに何の障碍もないようなものである。他力とは、衆生が自らの力によって進捗を目指すような修道ではなく、阿弥陀仏の本願力による往生道であることを表している。

続く文には、

愚かなる哉後の学者、他力の乗ずべきことを聞て当に信心を生ずべし。自ら局分すること勿れとなり。（『真聖全』一・三四八頁）

と述べられている。これはこれまで述べてきたことを結び、信を勧める文である。後の世に仏道を学ぼうとする者に、他力こそ乗託すべき仏道であることをよく聞き開いて、信心を生ずべきであり、自力の修道に拘泥すべきでないことが述べられている。このように『浄土論註』には、自力と他力との対比を通して、阿弥陀仏の本願力による他力に乗託すべきことが勧められている。

次に『略論安楽浄土義』には他力について、

一切の万法は皆自力・他力、自摂・他摂有りて、千開万悶无量无辺なり、安ぞ一有礙の識を以て无礙の法を

疑うことを得んや。又五の不思誼の中に仏法最不可思誼なり、而るに百年の悪を以て重と為し、十念の念仏を疑ひて軽と為して、安楽に往生して正定聚に入ることを得ずといはば、是の事然らず。

（『真聖全』一・三七一頁）

と述べられている。『略論安楽浄土義』は六問答（一説には九問答）から構成されているが、その第五問答のなかの文である。第五問答では、いかなる疑惑心によって胎生往生となるのかを問い、それに対して『大経』に説かれる「不了仏智・不思議智・不可称智・大乗広智・無等無倫最上勝智」を取り上げて答えている。この五句のうち初句を所疑とし、下の四句は所疑を対治するものと位置付けて述べられていく。そして対治されるべきものとして四疑が示されるが、第一の疑いに関する叙述のなかで他力の語が用いられている。第一の疑いとは次のようなものである。生涯悪を造り続けた衆生であり、また三界という迷いの世界に繋ぎ止める煩悩を断つこともない衆生が、ただ阿弥陀仏を憶念することによってだけでは必ずしも浄土に往生することはできないのではないかという疑いである。このような疑いを対治するがゆえに「不思議智」であると示されて解説がなされている。引用した文は、解説の結びとして置かれているものである。文意は次の通りである。一切の法には、全て自力・他力、自摂・他摂があって種々無量である。だから、凡夫の有碍の認識によって仏の無碍の法を疑うことがどうしてできようか。また五つの不思議のなかで仏法が最も不可思議である。そうであるのに、三界に繋ぎ止める業は重く、十念の念仏は軽いから浄土に往生して正定聚に入ることはできないのではないかと疑うことは全く間違っている。ここでも自力・自摂（自力による摂持）に対して他力・他摂（他力による摂持）が述べられている。『浄土論註』で示されていたように、他力とは阿弥陀仏の本願力による力用であり、その本願力によって摂持され、たもたれ

ていくことである。

以上のように曇鸞は『浄土論註』においては「他力」と示し、『略論安楽浄土義』においては「自力・他力、自摂・他摂」と示している。そして曇鸞以降の祖師が「他力」の語を用いる際には、文言に多少の違いはあっても基本的には『浄土論註』と『略論安楽浄土義』の記述内容を踏襲している。文意は先述しているので、以下、該当箇所を示すに留めたい。

【道綽】道綽の『安楽集』上巻「第二大門」には、

一切の万法は皆自力・他力、自摂・他摂有りて千開万閉無量無辺なり。（『真聖全』一・四〇〇頁）

と述べられている。また『安楽集』上巻「第三大門」には、

五には唯自力のみ有りて他力の持つ無し。斯の如き等の事目に触るるに皆是なり。…（中略）…問て曰く。菩提は是一なり。修因亦応に不二なるべし。何が故ぞ此に在りて因を修して仏果に向うを名けて難行と為し、浄土に往生して大菩提を期するをば乃ち易行道と名くるや。答て曰く。諸の大乗経に弁ずる所の一切の行法皆自力・他力、自摂・他摂有り。何者か自力なる。譬へば人有りて生死を怖畏して発心出家して定を修し通を発して四天下に遊ぶが如きを名けて自力と為す。何者か他力なる。劣夫有りて己身の力を以て驢に擲ち上らざれども、若し輪王に従へば即便ち空に乗じて四天下に遊ぶが如し。即ち輪王の威力の故に他力と名く。衆生も亦爾なり。此に在りて心を起し行を立て浄土に生れんと願ず、此は是自力なり。命終の時に臨みて阿弥陀如来光台迎接して遂に往生を得るを即ち他力と為す。故に『大経』（巻上意）に云く。「十方の人天、我

国に生ぜんと欲はん者は皆阿弥陀如来の大願業力を以て増上縁と為さざるは莫し」と。若し是くのごとくならずば四十八願便ち是徒設ならん。後の学者に語る、既に他力の乗ずべき有り、自ら己が分を局りて徒に火宅に在ることを得ざれ。

（『真聖全』一・四〇六頁）

と述べられている。また『安楽集』下巻「第五大門」には、

問て曰く。若し西方の境界勝にして禅定の為に感ずべくば、此の界の色天は劣にして禅定の為に招くべからざるや。答て曰く。若し修定の因を論ずれば彼此に該通す。然るに彼の界は位是不退にして幷びに他力の持つ有り。是の故に説きて勝と為す。此の処は復定を修するに剋すと雖も但自分の因のみ有りて闕けて他力の摂する無し。業尽くれば退することを免れず。此に就いて説かく、如かずと。

（『真聖全』一・四二四頁）

と述べられている。

【源信】次に源信の『往生要集』巻下末「第十　問答料簡」には他力について、

一切の万法は、皆自力・他力、自摂・他摂にして、千開万閉无量无辺なり、豈有碍の識を以て彼の无碍の法を疑うことを得んや。

（『真聖全』一・九〇六頁）

と述べられている。

【法然】次に法然の『選択集』には他力について、

五には唯是自力にして他力の持つ無し。斯等の如きの事目に触るるに皆是なり。譬へば陸路の歩行は則ち苦

しきが如し。易行道は、謂く但信仏の因縁を以て浄土に生ぜんと願ず。仏願力に乗じて便ち彼の清浄の土に往生を得しむ。仏力住持して即ち大乗正定の聚に入る。正定は即ち是阿毘跋致なり。

（『真聖全』一・九三二頁）

と述べられている。

このように法然の『選択集』における他力の語の用例は一例である。しかし『漢語灯録』『和語灯録』『西方指南抄』等においては他力の語が多く用いられている。そのなかから『和語灯録』と『西方指南抄』での用例をいくつか取り上げる。

『和語灯録』「念仏往生要義抄」には、

問ていわく、称名念仏申す人は、みな往生すべしや。答ていわく、他力の念仏は往生すべし、自力の念仏はまたく往生すべからず。

問ていわく、その他力の様いかん。答ていわく、ただひとすぢにわが身の善悪をかえり見ず、決定往生せんとおもひて申すを、他力の念仏という。たとへば麒麟の尾につきたる蠅の、ひとはねに千里をかけり、輪王の御ゆきにあいぬる卑夫の、一日に四天下をめぐるがごとし。これを他力と申す也。又おおきなる石をふねにいれつれば、時のほどにむかいのきしにとづくがごとし。またくこれは石のちからにはあらず、ふねのちからなり。それがように、われらがちからにてはなし、阿弥陀ほとけの御ちから也。これすなわち他力なり。

（『真聖全』四・五九一頁）

と述べられている。問答の問いは、称名念仏する人は全て往生できるのかと問うている。その問い対して法然は、

他力の念仏では往生できるが、自力の念仏では全く往生することができないと答えている。そこに自力の念仏に簡んで他力の念仏が示されている。そして他力について「阿弥陀ほとけの御ちから也」と述べられている。すなわち浄土往生を成立せしめる念仏とは他力の念仏であり、他力による念仏なのであると確かめられている。そして往生について『西方指南抄』「法然聖人御説法事」には、

念仏を申て往生を願はん人は、自力にて往生すべきにはあらず、ただ他力の往生也。

（『定親全』五・八八～九頁）

と述べられている。往生も他力という言葉と関連付けられながら、他力の往生、他力による往生と示されている。他力について『西方指南抄』「浄土宗の大意」には、

浄土宗のこころは、聖道・浄土の二門をたてて、一代の諸教をおさむ。聖道門というは、娑婆の得道なり、自力断惑出離生死の教なるがゆえに、凡夫のために、修しがたし、行じがたし。浄土門というは、極楽の得道なり、他力断惑往生浄土門なるがゆえに、凡夫のためには、修しやすく、行じやすし。

（『定親全』五・二八八～九頁）

と述べられている。ここでは「自力断惑出離生死の教」に対して「他力断惑往生浄土門」が示されている。同じく『西方指南抄』「要義問答」には、

問。一切の善根は魔王のためにさまたげらる、これはいかがして対治し候べき。答。魔界というものは、衆生をたぶろかすものなり。一切の行業は、自力をたのむがゆえ也。念仏の行者は、みおば罪悪生死の凡夫とおもえば、自力をたのむ事なくして、ただ弥陀の願力にのりて往生せんとねがうに、魔縁たよりをうる事な

し。観慧をこらす人にも、なお空界の魔事ありという。弥陀の一事には、もとより魔事なし、観人清浄なるがゆえにといえり、仏をたぶろかす魔縁なければ、念仏のものおばさまたぐべからず、他力をたのむによるがゆえに、百丈の石をふねにおきつれば、万里の大海をすぐというがごとし。または念仏の行者のまえには、弥陀・観音つねにきたりたまう。二十五の菩薩、百重千重護念したまうに、たよりをうべからず。

（『定親全』五・三五四～五頁）

と述べられている。ここでは善根が魔王によって障碍されるのを如何に対治するかが問答されている。その答えとして、自力をたのむ善根は魔王に障げられるが、他力をたのむ念仏は魔王に障げられることはないと述べられている。

第五節　本願の念仏による往生道――善導と法然を通して――

以上のように法然は、念仏往生の全体が他力によるものであると述べている。このような他力による念仏往生ということは、言葉を換えて言うならば本願のはたらきによる念仏往生ということである。本願のはたらきによる念仏であるし、本願のはたらきによる往生である。本願のはたらきによる念仏往生が『和語灯録』「諸人伝説の詞」には、

本願の念仏には、ひとりだちをせさせて助をささぬ也。助さす程の人は、極楽の辺地にうまる。すけと申すは、智慧をも助にさし、持戒をもすけにさし、道心をも助にさし、慈悲をもすけにさす也。それに善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただうまれつきのままにて念仏する人を、念仏にすけささぬ

とは申す也。　（『真聖全』四・六八二～三頁）

と述べられている。本願の念仏は「ひとりだち」をなされて、そのほかの一切の助けや補助を付け加えることを必要としないと述べられている。補助などを一切介在させることなく、念仏のみで往生を成就するのである。念仏往生においては、智慧や持戒や菩提心や慈悲などの一切を必要としないし、またそれらは全く往生の要件とならないのである。本願の念仏、ただそのことによって全ての凡夫人が往生するのであると示されている。

法然は、他力による往生浄土の根幹は念仏にあることを示して、「本願の念仏」とか「選択本願の念仏」と繰り返し述べている。そのような法然による念仏観や往生観を決定付けたのは、『選択集』「結勧」に、

偏に善導一師に依るなり。　（『真聖全』一・九九〇頁）

と述べられている善導である。本願の念仏による往生とは善導が指し示してくれたことであった。法然の回心の契機となったのは善導の『観経疏』「散善義」に、

一心に弥陀の名号を専念して、行住坐臥、時節の久近を問はず、念念に捨てざるは、是を正定の業と名く。彼の仏願に順ずるが故に。　（『真聖全』一・五三八頁）

と述べられる文である。一心に阿弥陀仏の名号を専念する称名念仏は、本願に願われた行であり、仏願に随順する行である。このような阿弥陀仏の本願に基づく念仏を、善導や法然は顕開していった。念仏は衆生の自力による行ではなく、阿弥陀仏の本願に基づく行であり、本願の念仏である。そのような本願の念仏を特に第十八願に焦点を当てて、善導と法然は明らかにしていった。

【善導】善導は四十八願に関して『観経疏』「玄義分」で、

『無量寿経』に云く。法蔵比丘、世饒王仏の所に在まして、菩薩の道を行じたまいし時、四十八願を発して、一一の願に言わく、若し我仏を得んに、十方の衆生、我が名号を称して、我が国に生れんと願ぜん、下十念に至るまで、若し生れずば、正覚を取らじと。

（『真聖全』一・四五七頁）

と述べている。四十八願の各々に称名念仏による往生が願われているという解釈である。四十八願の全体を貫く根本の願いとは、称名による往生を願ものである。善導はこのように四十八願を了解したのである。そして四十八願のなかで称名による往生を正しく説き明かしているのが第十八願である。善導は第十八願を『観念法門』と『往生礼讃』に引用している。『観念法門』「摂生増上縁」には、

『無量寿経』（巻上意）の四十八願の中に説くが如し。「仏言はく。若し我成仏せんに、十方の衆生、我国に生ぜんと願じて、我が名字を称せんこと、下十声に至るまで、我が願力に乗じて、若し生れずば、正覚を取らじ」と。

（『真聖全』一・六三五頁）

と述べている。また『往生礼讃』「後序」には、

『無量寿経』に云うが如し。若し我成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称せんこと、下十声に至るまで、若し生れずば正覚を取らじ。

（『真聖全』一・六八三頁）

と述べている。善導が示す第十八願文は『大無量寿経』に説かれる文言通りではない。第十八願文にある「至心信楽（欲生我国）」が省略され、第十八願文にはない称名が加えられている。この省略と付加によって善導は、第十八願とは称名念仏による往生を願うものであることを明瞭にしていったのである。

第十八願を何故善導はそのように了解したのか。そこには自身と本願についての深い気付きがある。そのことを善導は二種深信として述べている。二種深信ついて『観経疏』「散善義」には、

一には決定して深く自身は現に是罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁有ること無しと信ず。二には決定して深く彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生を摂受して、疑無く慮無く、彼の願力に乗じて、定んで往生を得と信ず。

（『真聖全』一・五三四頁）

と述べられている。この文は「願力」の用例として既に取り上げているが、今回は信心（深信）における気付きを考察するために再度取り上げた。自身は迷いの世界を離れる手がかりがない罪深い凡夫である。そしてその凡夫が往生することを願ったのが阿弥陀仏の本願なのである。それゆえに本願は称名念仏による往生を願った。何故なら凡夫には観（観想や観察）による往生は成り立たないからである。そのことを善導は『往生礼讃』「前序」で、

問て曰く。何が故ぞ観を作さしめずして、直に専ら名字を称せしむるは、何の意か有るや。答て曰く。乃し衆生障重くして、境は細なり心は麁なり、識颺り神飛びて、観成就し難きに由てなり。是を以て大聖悲憐して直に勧めて専ら名字を称せしむ。正しく称名易きに由るが故に、相続して即ち生ずと。

（『真聖全』一・六五一頁）

と述べている。自身とは観が成立し得ない凡夫である。善導はそのような人間観に立って本願を了解した。本願とは、凡夫が称名念仏によって往生することを願うものに他ならなかった。

第十八願について善導は、三経（『無量寿経』と『観経』と『阿弥陀経』）の教えを照らし合わせながら了解して

いる。『観経』「散善」では九品の往生が説かれている。そのなかの下品下生では、一生涯罪を作り続けてきた凡夫が、仏を念ずる念仏ではなく、称名念仏によって往生することが説かれている。また『阿弥陀経』には一心に阿弥陀仏の名号を執持して往生を得ることが説かれている。三経の教えを通して善導は、凡夫が称名念仏によって往生することを願うのが第十八願であると了解したのである。そして仏（釈迦・弥陀・諸仏）は凡夫に対して称名念仏による往生を勧めているのであり、その根源にあるのが第十八願であると善導は了解したのである。

その本願の成就について説かれた本願成就文について、善導は『観念法門』「証生増上縁」に、

『無量寿経』（巻下意）に云うが如し。「仏阿難に告げたまはく、其れ衆生有りて、彼の国に生ずれば、皆尽く正定の聚に住す。十方の諸仏皆共に彼の仏を讃歎したまう。若し衆生有りて其の名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。彼の国に生れんと願ぜば、即ち往生を得不退転に住せん」と。

（『真聖全』一・六三九頁）

と述べている。文言の違いや省略はあるが、『無量寿経』下巻に説かれている第十一願・第十七願・第十八願の成就文を引用して述べている。第十八願成就文にある「乃至一念」の文言を善導がどのように了解したのかは明確には分からない。しかし四十八願全体や第十八願を称名念仏による往生を願うものと了解するのが善導であることを踏まえるならば、「乃至一念」を称名念仏と了解していたと考えられる。また後に親鸞が重視する「至心回向」の文言を、善導は引用していない。このことにも注意を引かれるが、「至心回向」の文言は、親鸞に至ってこそ、如来による回向を表すものとして特に重要な意味が見出されていったと言えるであろう。

【法然】法然は四十八願について『選択集』「特留章」で、

凡そ四十八願皆本願なりと雖も、殊に念仏を以て往生の規と為す。…（中略）…故に知んぬ、四十八願の中に、既に念仏往生の願を以て、本願の中の王と為すなり。

（『真聖全』一・九五五頁）

と述べている。第十八願こそが四十八願のなかの中心であり、「本願の中の王」であると示している。その第十八願を主題として取り上げているのが『選択集』「本願章」である。その冒頭の標章には、

弥陀如来、余行を以て往生の本願と為したまわず、唯念仏を以て往生の本願と為したまえるの文

（『真聖全』一・九四〇頁）

と述べられている。法然は『無量寿経』の異訳を参照して、本願においてなされた重要なこととは、選び取り選び捨てるという、選択であると述べる。四十八願の各々において選択があるが、その要は第十八願における選択である。第十八願は、余行を選び捨て、ただ念仏の一行を選び取る。この選択があったからこそ全ての衆生が救われる道が開かれたのである。このような選択こそが本願の要であると法然は述べる。法然は、選択に焦点を絞って第十八願を解釈している。

阿弥陀仏の本願は何故に余行を選び捨て、ただ念仏を選び取るのか。その理由について法然は「勝劣の義」と「難易の義」によって述べている。一番目の「勝劣の義」について法然は、

初に勝劣とは、念仏は是勝、余行は是劣なり。所以は何ん。名号は是万徳の帰する所なり。

（『真聖全』一・九四三～四頁）

と述べる。名号には仏の自利利他の一切の功徳が摂められている。それに対して念仏以外の諸行は、各々一隅を

守るという部分的な意味合いしかもたない。だから劣っていると述べる。二番目の「難易の義」について法然は、

次に難易の義とは、念仏は修し易く、諸行は修し難し。

（『真聖全』一・九四四頁）

と述べる。念仏は修することが易しい行であり、それに対して諸行は修することが困難な行である。それゆえ本願は、どのような人や時や場所においても修することができる念仏を選択した。その意味を法然は、

然れば則ち弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を摂せんが為に、造像・起塔等の諸行を以て往生の本願と為したまはず、唯称名念仏の一行を以て、其の本願と為したまえり。

（『真聖全』一・九四五頁）

と述べる。本願はどのような在り方をする衆生も平等に慈しむ。そして一人も漏らさず往生させるために、念仏以外の行を選び捨て、念仏一行を選び取ったのである。法然は聖道門の修行が成立し得ない自身の時機（末法という時代を生きる凡夫という機）の問題に直面した。そしてその自身が救われていく道を念仏往生の本願に聞き取ったのである。念仏は、平等の慈悲によって選択された行であり、阿弥陀仏の慈悲を表している行である。

法然は、四十八願の各々の願が成就していることを述べ、その上で第十八願成就文を引用している。

即ち念仏往生の願成就の文に、「もろもろの衆生あって、その名号を聞きて信心歓喜して、ないし一念心を至して回向して、かの国に生ぜんと願ずれば、即ち往生を得て不退転に住す」と云う、これなり。

（『日本思想大系　一〇　法然　一遍』一〇七頁）（『浄土宗全書』一・一九頁）（『真聖全』は親鸞による訓点を反映している。よってこの箇所は『日本思想大系　一〇　法然　一遍』所収『選択集』の延書および『浄土宗全書』第一巻所収の『無量寿経』の訓点を参照した）

法然にとって、第十八願は「念仏往生の願」であるゆえに、その成就文は「念仏往生の願成就の文」である。したがって「ないし一念」は、衆生による称名念仏の一念を意味する。そして「心を至して回向して」は、衆生による回向を意味する。法然は『選択集』において、念仏は十願・十行を具足しており、衆生による回向を用いなくても往生の行となると述べている。しかし第十八願成就文には「心を至して回向して」と述べている。このことに関して『和語灯録』「十二箇条問答」には、

次に回向発願心というは、わが修するところの行を回向して、極楽にうまれんとねがう心也。わが行のちから、わが心のいみじくて往生すべしとはおもはず、ほとけの願力のいみじくおはしますによりて、うまるべくもなき物もむまるべしと信じて、いのちおはらば仏かならずきたりてむかへ給へと思う心を、金剛の一切の物にやぶられざるがごとく、この心をふかく信じて、臨終までもとおりぬれば、十人は十人ながらうまれ、百人は百人ながらうまるる也。

（『真聖全』四・六三八～九頁）

と述べられている。ここには衆生による回向が示されているが、衆生の力で往生すると思うべきではないと述べられている。たとえ衆生によって念仏を回向することが述べられていようとも、根源的には仏の願力よって往生するのである、これが法然における念仏往生の了解なのである。このように、法然にとって第十八願とは「念仏往生の願」であり、第十八願成就とは「念仏往生の願成就」に他ならないのである。

第二章　親鸞における他力・本願力の思想

第一節　如来による回向

ここからは浄土三部経および七祖における「他力」「本願力」の教示を踏まえて展開されている、親鸞による「他力」「本願力」の思想を見ていく。

親鸞は他力について『教行信証』「行巻」に、

しかれば真実の行信を獲れば、心に歓喜多きがゆえに、これを「歓喜地」と名づく。これを初果に喩うることは、初果の聖者、なお睡眠し懶堕なれども、二十九有に至らず。いかにいわんや、十方群生海、この行信に帰命すれば摂取して捨てたまわず。かるがゆえに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力と曰う。

（『定親全』一・六七～八頁、『真宗聖典』一九〇頁）

と述べている。衆生が行信に帰命するならば、仏はその衆生を摂取して捨てられない。そのような摂取不捨のはたらきこそ阿弥陀仏と申し上げるのであり、これを他力と言うのであると示されている。行信に帰命するところに衆生が得る摂取不捨の利益をもって阿弥陀仏、そして他力が確かめられている。先述したが、同じく『教行信証』「行巻」に、

他力と言うは、如来の本願力なり

（『定親全』一・七一頁、『真宗聖典』一九三頁）

と述べている。先には衆生が得る利益をもって阿弥陀仏・他力が確かめられていたが、ここでは「如来の本願力」という言葉をもって他力が確かめられている。それではその如来の本願力とは如何なることか。そのことを如来回向、すなわち如来による回向として考察していく。以下に、親鸞が本願力を如来の回向と結び付けられながら述べる文章を幾つか取り上げる。最初は『教行信証』「行巻」の「正信偈」の文である。そこには、

天親菩薩、論を造りて説かく、無碍光如来に帰命したてまつる。修多羅に依って真実を顕して、横超の大誓願を光闡す。広く本願力の回向に由って、群生を度せんがために、一心を彰す。

（『定親全』一・八八頁、『真宗聖典』二〇六頁）

と述べられている。ここには「本願力の回向」という言葉がある。

次は『教行信証』「信巻」の文である。そこには、

「能生清浄願心」と言うは、金剛の真心を獲得するなり。本願力回向の大信心海なるがゆえに、破壊すべからず。これを「金剛のごとし」と喩うるなり。

（『定親全』一・一三一頁、『真宗聖典』二三五頁）

と述べられている。ここでは「本願力回向の大信心海」と述べられている。次も『教行信証』「信巻」の文であるが、

しかるに『経』に「聞」と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを「聞」と曰うなり。「信心」と言うは、すなわち本願力回向の信心なり。（『定親全』一・一三八頁、『真宗聖典』二四一頁）

と述べられている。ここでも信心が「すなわち本願力回向の信心なり」と、本願力回向という言葉が使われている。このように見てくると、親鸞は本願力を回向という言葉と結び付けて表していることが分かる。それは本願

力による回向という意味である。他力とは如来の本願力である。そしてその本願力とは具体的には如来による回向ということである。

次は親鸞が回向を他力と関係づけて述べている用例を見ていく。『浄土三経往生文類』には、

如来の二種の回向によりて、真実の信楽をうる人は、かならず正定聚のくらいに住するがゆえに、他力ともうすなり

（『定親全』三・二八頁、『真宗聖典』四七一頁）

と述べられている。如来の二種の回向によって信心を獲得した人は、間違いなく正定聚の位に住するのであり、このような事柄・はたらきを他力と言うのであると述べられている。次の『末燈鈔』（第十八通）には、

御たずねそうろうことは、弥陀他力の回向の誓願にあいたてまつりて、真実の信心をたまわりてよろこぶこころのさだまるとき、摂取してすてられまいらせざるゆえに、金剛心になるときを、正定聚のくらいに住すとももうす。

（『定親全』三・一〇四頁、『真宗聖典』六〇八頁）

と述べられている。ここには「弥陀他力の回向」という言葉遣いがある。このように親鸞は、他力に関して回向をもって表し、回向との深い関係において他力を語っている。「行巻」の「他力と言うは、如来の本願力なり」という言葉と重ね合わせるならば、他力とは如来の本願力であり、そのことは具体的には如来回向である。そのことを親鸞は繰り返し示している。

その如来による回向の内実に関して行と信を取り上げて見ていきたい。一般的には行や信とは各人による行為や信仰であると捉えられている。しかし親鸞は行も信も如来による回向成就であると述べる。親鸞は行と信を「大行」「大信」とか「真実行」「真実信」と述べている。『教行信証』「信巻」には、

しかれば、若は行・若は信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまうところにあらざることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなりと。知るべし。

（『定親全』一・一一五頁、『真宗聖典』二二三頁）

と述べられている。如来より回向された行信が往生成仏の因なのであって、それ以外に因があるのではないことをよく知りなさい、と述べられている。そのように行と信が如来による回向成就であると示されている。

第二節　如来回向の内実

第一項　大行・真実行

親鸞は、大行・真実行と大信・真実信とが阿弥陀仏の本願に本源をもち、本願の力用によって回向成就していることを示している。先述したように浄土往生の行としての念仏を、善導と法然は第十八願に焦点を当てて本願の念仏として明らかにした。その第十八願は『大経』に、

設我得仏十方衆生至心信楽欲生我国乃至十念若不生者不取正覚唯除五逆誹謗正法（たとい我、仏を得んに、十方の衆生、心を至し信楽して我が国に生れんと欲いて、乃至十念せん。若し生まれずば、正覚を取らじ。唯五逆と誹謗正法を除く）

（『真聖全』一・九頁）

と説かれている。善導や法然は念仏に焦点を当てて第十八願を了解した。そもそも第十八願文のなかには信心と念仏の両方の事柄が説かれている。「至心信楽欲生我国（心を至し信楽して我が国に生れんと欲いて）」は信心を意味する。そして「乃至十念（乃至十念せん）」は念仏を意味する。第十八願文に信心と念仏との両方の要素が含ま

れていることは、法然も親鸞も十分に承知していた。そのうえで法然は、第十八願を念仏に焦点を絞って表す。そして信心に関しては『観経』に説かれる三心（至誠心、深心、回向発願心）によって述べることを通例とした。これに対して親鸞は、第十七願に着目して念仏（真実行・大行）を確かめている。そして第十八願は信心に焦点を絞って明らかにしている。

ここからは親鸞が第十七願によって大行・真実行を顕開したことを見ていく。第十七願文は『無量寿経』に、

たとい我、仏を得んに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、我が名を称せずば、正覚を取らじ。

（『真聖全』一・九頁）

と説かれている。第十七願は、十方の諸仏に阿弥陀仏の名号が称讃せられることを願うものである。このことによって名号が十方世界に広まり、十方の衆生が名号を聞くことができるように願うものである。このような第十七願に対する着眼は、法然の『三部経大意』（『真聖全』四・五五三～四頁）や聖覚の『唯信鈔』（『定親全』六・四五～六頁）にも見ることができる。親鸞はこれらの了解を踏襲しているが、親鸞はさらに一歩踏み込んだ解釈を示している。それは衆生による称名も第十七願との関係で表そうとするものである。第十七願文には諸仏による称揚や称名は説かれているが、衆生による称名は説かれていない。しかし親鸞は第十七願を挙げて表す『教行信証』「行巻」において、

大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。

（『定親全』一・一七頁、『真宗聖典』一五七頁）

と述べる。また、

しかれば名を称するに、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたまう。

（『定親全』一・二三頁、『真宗聖典』一六一頁）

と述べている。これらは衆生による称名を意味するものである。親鸞は、諸仏称名によって衆生が名号を聞くことができるという点だけではなく、その衆生による称名念仏をも第十七願によって表そうとしている。称名念仏すなわち南無阿弥陀仏は、衆生を超えた真実行であり、阿弥陀の名号である。それゆえに、衆生が称えたからといって自分の行であると私有化することができない行である。真実行・大行としての称名念仏とは、その全体が諸仏称名によって勧められ、そして諸仏称名によって衆生自身が称えしめられている行である。さらに根源的には衆生を招喚する本願の勅命としてあるものである。そのことが『教行信証』「行巻」には、

しかれば、「南無」の言は帰命なり。…（中略）…ここをもって、「帰命」は本願招喚の勅命なり。

（『定親全』一・四八頁、『真宗聖典』一七七頁）

と述べられている。このような意味をもつ真実行・大行を明らかにしょうとして、親鸞は『教行信証』「行巻」の標挙に、

諸仏称名の願　浄土真実の行　選択本願の行

（『定親全』一・一六頁、『真宗聖典』一五六頁）

と述べて、第十七願・諸仏称名の願を挙げているのである。

第二項　大信・真実信

親鸞は大行・真実行を第十七願・諸仏称名の願で顕す。そして大信・真実信は第十八願によって顕している。それは何故なのであろうか。親鸞が第十八願を念仏ではなく信心に焦点を当てて受け止めていったのは、信心こ

そが衆生にとって大きな課題であることに気付かされたからである。『教行信証』「行巻」の「正信偈」には、

弥陀仏の本願念仏は、邪見驕慢の悪衆生、信楽を受持すること、はなはだもって難し。難の中の難、これに過ぎたるはなし。

（『定親全』一・八七頁、『真宗聖典』二〇五頁）

と述べられる。本願念仏の仏道において、行は易行であるが、その本願念仏を疑いなく信じることは決定的に困難なのである。これは親鸞自身が直面した問題である。真実がない衆生から真実の信心は起こり得ない。親鸞はこの問題を深く掘り下げていくことを通して、このような衆生を救おうとする願として第十八願を聞き取っていったのである。第十八願とは、真実がない衆生に真実信心を回向成就しようとする願である。親鸞は『教行信証』「信巻」において、真実信・大信は第十八願によって成就することを明らかにしている

親鸞は真実信心について『尊号真像銘文』に、

弥陀如来回向の真実信心なり。

（『定親全』三・一一六頁、『真宗聖典』五三一頁）

と述べている。真実信心は阿弥陀如来の回向によって成就するものである。また、『教行信証』「信巻」に、

「信心」と言うは、すなわち本願力回向の信心なり。

（『定親全』一・一三八頁、『真宗聖典』二四〇頁）

と述べている。阿弥陀如来の本願力の回向による信心であると述べている。このように真実信心を如来回向の信心として顕すところに、親鸞が顕す信心の特徴がある。

この如来回向の信心は『歎異抄』には「如来よりたまわりたる信心」（『定親全』四・一〇頁、『真宗聖典』六二九頁）と述べられている。如来からいただいた信心であるという意味である。その言葉は、次のような場面で使用されている。同じように念仏の道を歩む人々のなかで、あの者は自分の弟子だ、この者は他人の弟子だと言い争

い、弟子を奪い合うことが起きていた。そのことに対して親鸞は、そのような言い争いはとんでもないことであると言う。そして、

親鸞は弟子一人ももたずそうろう。

（『定親全』四・九頁、『真宗聖典』六二八頁）

と、親鸞は弟子を一人ももっていないのであると述べている。何故、親鸞はこのように言ったのか。それは、自分の努力や計画によって他の人が念仏者になるのではないことを親鸞がよく知っていたからである。そのことを親鸞は「如来よりたまわりたる信心」（『定親全』四・一〇頁、『真宗聖典』六二九頁）と述べたのである。真実信心とは、阿弥陀如来から賜ったものである。人が念仏の教えを信じ、阿弥陀仏の本願の大切な意味を知る、そのような信心とは、徹底して阿弥陀仏の力用によって起こるものである。決して人間の力によって起こるものではない。そして親鸞が用いる「如来よりたまわりたる信心」という言葉は、元を辿るならば法然の言葉であった。そのことが『歎異抄』のなかで、

「源空が信心も、如来よりたまわりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり。されば、ただひとつなり。別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらんずる浄土へは、よもまいらせたまいそうらわじ」

（『定親全』四・三五～六頁、『真宗聖典』六三九頁）

と述べられている。この「如来よりたまわりたる信心なり」という法然の教えは、親鸞の信心観に大きな示唆を与えるものであった。

親鸞は『教行信証』「信巻」「別序」で、

それ以みれば、信楽を獲得することは、如来選択の願心より発起す、真心を開闡することは、大聖矜哀の善

巧より顕彰せり。

（『定親全』一・九五頁、『真宗聖典』二一〇頁）

と述べている。ここには真実信心の獲得に関して、阿弥陀如来の願心と釈尊の教えが示されている。それは人が真実信心を獲得するについての因と縁を表している。すなわち真実信心とは、如来の本願を因とし、真実の教えを縁として、人に獲得される事柄なのである。真実信心とは、人が道を求める歩みのうえに、真実の教えに出遇うことを通して明らかになる事柄である。このことは親鸞の生涯の上においてもよく窺えることである。このようにして人に獲得される真実信心であるが、その真実信心の根拠や根源は人間にあるのではなく、阿弥陀の本願にあると親鸞は述べている。

親鸞は何故このように述べるのであろうか。それは先述したように、法然による「如来よりたまわりたる信心」という示唆を承けたものには違いないが、単にそれだけではない。それは真実信心の自覚内容と深く関わりをもって述べられているのである。真実信心の自覚内容とは、自己についての信知と、その自己にはたらく阿弥陀の本願についての信知である。このことを明確に示したのが、善導による二種深信の文である。二種深信を表す文は善導の『観経疏』「散善義」や『往生礼讃』に述べられている。「散善義」の文は前に取り上げたが、そこには、自身を深信することと阿弥陀仏の本願を深信することが、信心の内容であると示されている。そして『往生礼讃』「前序」には、

二には深心、即ち是真実の信心なり。自身は是煩悩を具足せる凡夫、善根薄少にして三界に流転して、火宅を出でずと信知す。今弥陀の本弘誓願は、名号を称すること下至十声・一声等に及ぶまで、定んで往生を得しむと信知して、乃し一念に至るまで疑心有ること無し、故に深心と名く。

（『真聖全』一・六四九頁）

と述べられている。『往生礼讃』に依れば「深信」とは「信知」である。自身と本願を信知するという二種の信知、そのような自覚こそが真実信心の内容なのである。ここには真実信心の自覚内容に関する善導の大切な示唆がある。すなわち、どのようにしても生死の迷いを出離することができない罪悪生死の凡夫であるという自身が決定的に信知され、そしてそこに、そのような自身をこそ救済しょうとする本願が決定的に信知されているのである。このような信心の自覚内容を語っているのが二種深信である。

善導によって示されたような自身および本願の信知とは、人間による自己反省や救済の待望などではない。それらとは質を異にするものである。そのことが衆生における回心として顕される。

親鸞は回心について『唯信鈔文意』に、

「回心」というは、自力の心をひるがえし、すつるをいうなり。

（『定親全』三・一六七頁、『真宗聖典』五五二頁）

と述べている。また『歎異抄』第十六章には、

一向専修のひとにおいては、回心ということ、ただひとたびあるべし。その回心は、日ごろ本願他力真宗をしらざるひと、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのこころにては、往生かなうべからずとおもいて、もとのこころをひきかえて、本願をたのみまいらするをこそ、回心とはもうしそうらえ。

（『定親全』四・三〇頁、『真宗聖典』六三七頁）

と述べられている。「日ごろのこころ」や「自力の心」は、「弥陀の智慧をたまわりて」と言われる阿弥陀仏の智慧のはたらきによってこそひるがえされるのであり、その迷妄性が破られるのである。このような真実信心とは、

正しく阿弥陀仏のはたらきによって発起するものに他ならないのである。このような衆生における回心こそ、如来による回向を最も端的に表していると言えよう。

衆生の回心と如来の回向との関係を明らかにしているのが『教行信証』「信巻」にある三心一心問答である。三心一心問答では、天親の『浄土論』に述べられる「一心」と第十八願に説かれる「三心」（至心・信楽・欲生）との関係が丁寧に考察されている。そのことを通して、第十八願の至心・信楽・欲生によって衆生に真実信心が発起することが明らかにされている。

三心一心問答には二つの問答が述べられる。最初の問答では、第十八願の至心・信楽・欲生の三心は信楽の一心（真実信心）に帰着するのであり、天親はそのことを示していたと述べられる。

第二の問答の仏意釈では、衆生には真実心・信心・回向心がないことが徹底的に明らかにされている。そしてそのような衆生を救済しようとしてはたらくのが如来の三心である。そこでは至心は如来の真実心、信楽は如来の大悲心、欲生は如来の回向心として確かめられている。この如来の真実心・大悲心・回向心の力用によって成就する真実信心であるから、真実信心には真実の帰命と願生が伴う。そしてそのような真実信心とは、名号を聞くところに起こった信心であり、名号によって呼び覚まされた信心である。それゆえに親鸞は、真実信心の体（本質）は名号であると示している。そのように真実である如来の力用によって衆生に成就する真実の信心である。至心釈を取り上げてみるならば、

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして、清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。ここをもって如来、一切苦悩の衆生海を悲愍して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行

を行じたまいし時、三業の所修、一念・一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし。如来、清浄の真心をもって、円融無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就したまえり。如来の至心をもって、諸有の一切煩悩・悪業・邪智の群生海に回施したまえり。すなわちこれ利他の真心を彰す。かるがゆえに、疑蓋雑わることなし。この至心はすなわちこれ至徳の尊号をその体とせるなり。

（『定親全』一・一一六～七頁、『真宗聖典』二二五頁）

と述べられている。真実心などない衆生である。それゆえに如来は、その衆生を救済するために、徹底して真実心としてはたらくことが阿弥陀如来（法蔵菩薩）の至心として述べられている。このような如来の作用は「信楽釈」および「欲生釈」においても繰り返し述べられる。

親鸞は、第十八願を信心の願と了解すると共に、その成就文も信心の成就を説いたものと了解した。真実信心は如来の回向によって成就する。そのことを明確に示すために親鸞は、第十八願成就文をあえて二分して引用している。前半は「信楽釈」に、

本願信心の願成就の文、『経』（大経）に言わく、諸有の衆生、その名号を聞きて信心歓喜せんこと、乃至一念せん、と。已上

（『定親全』一・一二一頁、『真宗聖典』二二八頁）

と引用している。後半は「欲生釈」に、

ここをもって本願の欲生心成就の文、『経』（大経）に言わく、至心回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せんと。唯五逆と誹謗正法とを除く、と。已上

（『定親全』一・一二八頁、『真宗聖典』二三三頁）

と引用している。

第十八願成就文を二分することによって、親鸞は独自な解釈を示している。第一には、第十八願成就文の「一念」は、念仏ではなく信心であると示している。このような親鸞の了解は、

他方仏国の所有の衆生、無量寿如来の名号を聞きて、よく一念の浄信を発して歓喜せん。

（『定親全』一・一二一～二頁、『真宗聖典』二二九頁）

と説かれる『無量寿如来会』の第十八願成就文から示唆を得ている。

第二に親鸞は、第十八願成就文に説かれる「至心回向」は如来による回向であると示した。親鸞は「至心に回向せしめたまえり」と尊敬語の送り仮名を付して、回向の主体は衆生ではなく阿弥陀如来であることを明確にした。このように第十八願成就文が二分されると、「一念」と「回向」とは切り離され、衆生が一念の念仏を回向するという読み方はできなくなる。「一念」とは信心歓喜の一念、すなわち信の一念であると親鸞は示したのである。そして「回向」には尊敬語の送り仮名を付して、如来による回向であることを明示した。以上のように示すことによって親鸞は、真実信心は如来回向によって成就することを明らかにしたのである。

親鸞は、至心・信楽・欲生はことごとく衆生に対する如来の作用・はたらきであると示した。そして至心・信楽・欲生のなかで、その根源の作用は如来の回向心としての欲生であると親鸞は了解している。すなわち回向心としての欲生を根源として、大悲心としての信楽や真実心としての至心が展開するのであると、親鸞は了解している。さらに親鸞は、如来回向の最も本質的でかつ具体的な事柄とは、「至徳の尊号」である名号・南無阿弥陀仏の回施であると示している。親鸞は『一念多念文意』で、

「回向」は、本願の名号をもって十方の衆生にあたえたまう御のりなり。

（『定親全』三・一二七頁、『真宗聖典』五三五頁）

と述べている。ここでも如来回向の具体性が名号の回施として確かめられている。それは先に述べた衆生における回心や獲信ということも、その本質性や具体性から見るならば、本願の名号に呼び覚まされることに他ならないからである。親鸞における獲信は、法然の教言を通して本願の名号に値遇することの上に起こっている。親鸞は、如来の回向とは端的には衆生における回心であると表すと共に、如来回向の具体性とは名号の回施に他ならないと表している。以上のように親鸞は、真実信心とは如来回向によって成就する事柄であると顕している。このような真実である如来回向成就の信心であるがゆえに、『末燈鈔』（第一通）には、

真実信心の行人は、摂取不捨のゆえに、正定聚のくらいに住す。

（『定親全』三・五九頁、『真宗聖典』六〇〇頁）

と述べられる。すなわち真実信心において正定聚が語られるのである。また『教行信証』「信巻」には、

涅槃の真因はただ信心をもってす。

（『定親全』一・一一五頁、『真宗聖典』二二三頁）

と述べられる。すなわち真実信心こそが涅槃の真因なのである。

第三項　往相および還相

このように親鸞は、行（念仏）と信（信心）を如来回向成就の大行と大信と顕した。そしてさらに親鸞は、行と信だけでなく教・行・信・証の全体が如来の回向によるものであることを示している。『教行信証』「証巻」に

は、

それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。かるがゆえに、若は因若は果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまえるところにあらざることなし。因浄なるがゆえに、果また浄なり。知るべしとなり。

（『定親全』一・二〇一頁、『真宗聖典』二八四頁）

と述べられている。ここには教・行・信・証という四法に関して因と果ということが述べられている。その因に当たるのが行信である。そしてその果とは、「証巻」に示されるように無上涅槃の極果である。これは「証巻」の標挙の言葉で言うならば「必至滅度」とか「難思議往生」（『定親全』一・一九五頁、『真宗聖典』二七九頁）に当たる。これが果として示されている。そしてその果が清浄であるのは因が清浄だからであり、このことをよく知るべきであると述べられている。

このような、因が浄であるから果も浄であるという仏道の内容は、現生に正定聚の位に住して無上涅槃の証果を得ると述べられる。『三経往生文類』には、

大経往生というは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力ともうすなり。これすなわち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらいに住して、かならず真実報土にいたる。これは阿弥陀如来の往相回向の真因なるがゆえに、無上涅槃のさとりをひらく。これを『大経』の宗致とす。このゆえに大経往生ともうす。また難思議往生ともうすなり。（『定親全』三・二一頁、『真宗聖典』四六八頁）

と述べられている。これは大経往生・難思議往生を語る文である。大経往生というのは、如来が選択された海のように深広で不可思議な本願のはたらきによるものであり、これを他力というのである。この他力による仏道が

「これすなわち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり」と、まず因と果をもって表されている。そしてそのことの内容が詳しく「現生に正定聚のくらいに住して、かならず真実報土にいたる。これは阿弥陀如来の往相回向の真因なるがゆえに、無上涅槃のさとりをひらく。これを『大経』の宗致とす。このゆえに大経往生ともうす。また難思議往生ともうすなり」と述べられている。先述の言葉と重ねるならば、行信という因においてこの現生において正定聚の位に住するということである。正定聚の位に住するとは、必ず往生すべき身と定まるとか、必ず仏となるべき身と定まるということである。そして正定聚の位に住するがゆえに必ず真実報土に至る。すなわち真実報土に往生し、無上涅槃のさとりをひらくのである。すなわち他力・如来回向によって、現生において正定聚の位に住し、それゆえに必ず真実報土に往生する。その浄土に往生することをもって無上涅槃のさとりをひらく。このように大経往生・難思議往生が述べられている。ここには往相の回向が示されている。

先程の文には「無上涅槃のさとりをひらく」と述べられていたが、『教行信証』「行巻」には、

しかれば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。すなわち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す、普賢の徳に遵うなり。知るべし、と。

（『定親全』一・七〇頁、『真宗聖典』一九二頁）

と述べられている。ここには無上涅槃のさとりをひらくところからの展開が述べられている。「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。すなわち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す」というところまでは、先ほどの『三経往生文類』で語られていたことと同内容である。しかしそれに続けて「普賢の徳に遵うなり」と、ここには大涅槃を証するところからの展開が述べられている。

「普賢の徳」と表される慈悲によって衆生を教化する。普賢の徳に遵い、そのはたらきを顕わすものとなるということである。普賢の徳ということは『高僧和讃』「曇鸞讃」に、

還相の回向ととくことは　利他教化の果をえしめ　すなわち諸有に回入して　普賢の徳を修するなり

（『定親全』二・九四頁、『真宗聖典』四九二頁）

と述べられている。これは還相の回向として示されている。還相回向とは、如来の回向によって、往生成仏の涅槃の果として、他の衆生を教化利益するはたらきを得さしめられ、諸々の迷いの衆生のなかに立ち返って、普賢の徳である大慈悲を修するということである。このような還相回向については『三経往生文類』には、

二に、還相回向というは、『浄土論』に曰わく、「以本願力回向故、是名出第五門」これは還相の回向なり。一生補処の悲願にあらわれたり。

（『定親全』三・二七頁、『真宗聖典』四七〇頁）

と述べられている。

以上のように、他力の仏道、如来回向の仏道は、現生に正定聚の位に住し、必ず真実報土に至り無上大涅槃のさとりをひらく。さらには、そこから普賢の徳に遵うという大慈悲の展開が示されている。こういう往相と還相の全体が如来回向の仏道の内実として示されている。これらのことを親鸞が集約的に示しているのが、『教行信証』「教巻」の、

謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。

（『定親全』一・九頁、『真宗聖典』一五二頁）

という文である。浄土真宗という仏道の内実が、往相回向と還相回向という如来による二種の回向によって示さ

れている。そして往相の回向のなかに真実の教・行・信・証があると述べられている。また『浄土文類聚鈔』には、

しかれば、若は往・若は還、一事として如来清浄の願心の回向成就したまうところにあらざることあることなきなり。知るべし。

（『定親全』二・一三七頁、『真宗聖典』四〇八頁）

と述べられている。往相も還相もその全てが徹底して如来清浄願心の回向成就であると示されている。親鸞が顕す他力の仏道、如来回向の仏道とは、往相回向の内実としての真実の教行信証、そしてその証果から展開される還相回向。このように往相と還相という内実をもつ仏道であると示されている。

第三節　横超他力

第一項　横超

親鸞は法然によって教えられた本願念仏の一道、他力の念仏の一道を開顕していくが、その本願念仏の一道が『末燈鈔』（第八通）では、

二道というは、一には難行道、二には易行道なり。いまこの浄土宗は易行道なり。二行というは一には正行、二には雑行なり。いまこの浄土宗は正行を本とするなり。二超というは、一には竪超、二には横超なり。いまこの浄土宗は横超なり。竪超は聖道自力なり。

（『定親全』三・八一頁、『真宗聖典』六〇四頁）

と、浄土宗について易行道なり、正行を本とするなり、そして横超なりと述べられている。浄土宗が「横超」という言葉で表されている。また親鸞は『尊号真像銘文』に、

「横截五悪趣　悪趣自然閉」というは、横は、よこさまという。よこさまというは、如来の願力を信ずるゆえに行者のはからいにあらず。五悪趣を自然にたちすて、四生をはなるるを横という。他力ともうすなり。これを横超というなり。

（『定親全』三・七八頁、『真宗聖典』五一四頁）

と述べている。ここには「他力ともうすなり。これを横超というなり」と、「他力」が「横超」という言葉で捉えられている。

『尊号真像銘文』のこの箇所は『大無量寿経』下巻に、

必得超絶去　往生安養国　横截五悪趣　悪趣自然閉　昇道無窮極　易往而無人　其国不逆違　自然之所牽

（必ず超絶して去つることを得て、安養国に往生して、横に五悪趣を截り、悪趣自然に閉じん。道に昇るに窮極無し。往き易くして人なし。その国に逆違せず。自然の牽く所なり）（『真聖全』一・三一頁）（参照『真宗聖典』五七頁）

と説かれる教説の註釈として親鸞が述べたものである。この「横截五悪趣」等の教説は、道綽の『安楽集』（『真聖全』一・四二九頁）や源信の『往生要集』（『真聖全』一・七七八頁）でも着目されている。また法然は『漢語灯録』（「無量寿経釈」）で、

次に「横截五悪趣」（大経巻下）の文を以て、二門を分別するなり。抑も三乗・四乗の聖道は、正像既に過て、末法に至りてより、ただ教有て行証なき故に、末法近来断惑証理無（し）。断惑証理無（き）が故に、之を以て生死を出るの輩無し。往生浄土の法門は、未だ煩悩の迷を断ぜずと雖も、弥陀の願力に依て極楽に生ずる者の、永く三界を離て、六道生死を出ず。故に往生浄土の法は、是れ未だ断惑せず、三界を出ずるの法なり。…（中略）…天台・真言みな頓教と名づくと雖も、惑を断ずるが故猶これ漸教なり。未だ惑を断ぜ

ず三界の長迷を出過するが故に、この教をもつて頓中の頓とするなり。（『真聖全』四・二六三～四頁）

と述べている。「横截五悪趣」の教説によって、「三乗・四乗の聖道」と「往生浄土の法門」との二門を弁釈している。そして往生浄土の法門・教えこそが「頓中の頓」であると述べている。「横截五悪趣」の教説は『西方指南抄』（「要義問答」）にも、

されば こそ、易行道とは申ことにて候え。『双巻経』の文には、「横に五悪趣を截る、悪趣自然に閉ず、道に昇るに窮極無し。往き易くして人なし」ととけり、まことにゆきやすき事、これにすぎたるや候べき。

（『定親全』五・三四六頁）

と、易行道を表す教説として示されている。

このように着目されてきた「横截五悪趣」の教説であるが、親鸞はその語句に先立つ「必得超絶去　往生安養国」から取り上げて『尊号真像銘文』で、以下のように註釈している。

「必得超絶去　往生安養国」というは、必はかならずという。かならずというはさだまりぬというこころなり。また自然というこころなり。得はえたりという。超はこえてという。絶はたちすてはなる、という。去はすつという、ゆくという、さるというなり。娑婆世界をたちすてて、流転生死をこえはなれてゆきさるというなり。安養浄土に往生をうべしとなり。安養というは弥陀をほめたてまつるみこととみえたり。すなわち安楽浄土なり。「横截五悪趣　悪趣自然閉」というは、横は、よこさまという。よこさまというは、如来の願力を信ずるゆえに行者のはからいにあらず。五悪趣を自然にたちすて、四生をはなるるを横という。他力ともうすなり。これを横超というなり。横は竪に対することばなり。超は迂に対することばなり。竪はた

ただま、迂はめぐるとなり。竪と迂は自力聖道のこころなり。横超はすなわち他力真宗の本意なり。截というは、きるという。五悪趣のきずなをよこさまにきるなり。「悪趣自然閉」というは、願力に帰命すれば、五道生死をとずるゆえに自然閉という。閉はとずというなり。本願の業因にひかれて、自然にうまるるなり。

（『定親全』三・七七～八頁、『真宗聖典』五一四頁）

と述べている。『大経』の経文を「必得超絶去　往生安養国　横截五悪趣　悪趣自然閉」と取り上げることによって、この経文が「横超」「他力」を表すものであることを確かめているのである。「横超」という熟語は善導の『観経疏』「玄義分」の「勧衆偈」に、

道俗時衆等　各発無上心　生死甚難厭　仏法復難欣　共発金剛志　横超断四流　願入弥陀界　帰依合掌礼

（道俗時衆等、おのおの無上の心を発せども、生死甚だ厭いがたく、仏法また欣いがたし。共に金剛の志を発して、横に四流を超断せよ。弥陀界に願入して、帰依し合掌し礼したてまつれ）

（『真聖全』一・四四一頁）

と述べられている。この「横超断四流」について、親鸞は『教行信証』「信巻」で丁寧な註釈を述べている。このように「横超」という熟語自体は善導が示したものであるが、「横超」についての思想内容は『大経』に既に説かれていると親鸞は了解したのである。親鸞は「正信偈」において、

獲信見敬大慶喜　即横超截五悪趣（信を獲れば見て敬い大きに慶喜せん、すなわち横に五悪趣を超截す）

（『定親全』一・八七頁、『真宗聖典』二〇五頁）

と述べている。このように親鸞は『大経』の教説を踏まえながら、「即横超截五悪趣」という言葉遣いも示している。

先述したように親鸞は、「いまこの浄土宗は横超なり」（『末燈鈔』）、「横超はすなわち他力真宗の本意なり」（『尊号真像銘文』）と、浄土宗そして真宗を横超という用語で確かめている。また『愚禿鈔』には、

横超　如来の誓願　他力なり。

（『定親全』二・二四頁、『真宗聖典』四三八頁）

と述べられている。ここでも横超という語句で他力が表されている。このように親鸞は浄土宗や真宗や他力を「横超」の語で表しているが、そのことによって何を明らかにしようとしているのであろうか。

「横超」という用語は親鸞の著述のなかにも多く見られる。それらのなかで『愚禿鈔』では、「竪超」「竪出」「横超」「横出」という四種の用語を用いて教相判釈が示されている。すなわち釈尊による一代仏教が整理され、位置付けられている。この『愚禿鈔』の記述によって、「横超」という言葉で表される「仏教」が仏教全体のなかでどのような位置にあるのかを、親鸞は明らかにしていく。『愚禿鈔』下巻には、

真実に二種あり。

一には自利真実なり。

難行道　聖道門

竪超　即身是仏　即身成仏　自力なり。

竪出　自力中の漸教　歴劫修行なり。

二には利他真実なり。

易行道　浄土門

横超　如来の誓願　他力なり。

横出　他力中の自力なり。定散諸行なり。

（『定親全』二・二三～四頁、『真宗聖典』四三七～八頁）

と述べられている。善導は「至誠心」とは真実心であると確かめ、その真実には「自利真実」と「利他真実」（『真聖全』一・五三三頁）とがあると示している。それを承けて親鸞は、「自利真実」に関して「竪超」「竪出」、「利他真実」に関して「横超」「横出」を述べている。「竪超」「竪出」「横超」「横出」という「竪」「竪」・「横」「横」という順序で示されている。「竪（たて）」と「横（よこ）」とに分けて述べられているが、「竪」は自力を表し、「横」は他力を表している。そしてこの他力ということが横超の「横」の意味していることである。

次に横超の「超」という語については『愚禿鈔』の上巻で主題的に表されている。そこでは、

大乗教について、二教あり。

一には頓教、二には漸教なり。

頓教について、また二教二超あり。

…（中略）…

二超とは、

一には竪超

即身是仏、即身成仏等の証果なり。

二には横超

選択本願、真実報土、即得往生なり。

漸教について、また二教二出あり。

…（中略）…

二出とは、

一には竪出　聖道、歴劫修行の証なり。

二には横出　浄土、胎宮・辺地・懈慢の往生なり。

（『定親全』二・三～四頁、『真宗聖典』四二三～五頁）

と述べられている。ここには「竪超」「横超」「竪出」「横出」と、「超」・「超」・「出」・「出」という順序で示されている。それは大乗の仏教を「頓教」と「漸教」、すなわち「頓」と「漸」とに分けて明らかにしようとしているからである。「漸教」とは、段階的な修行を経て漸時に進んでいくものであり、この漸教が「出」という字で表されている。これに対して「頓教」とは、段階を経ないで直ちに証果を得るというものであり、この頓教が「超」と表されている。この頓教ということが横超の「超」の意味である。

このような「横超」という用語の「横」と「超」が意味することについては、先述の『尊号真像銘文』にも「横は竪に対することばなり。超は迂に対することばなり。竪はたださま、迂はめぐるとなり、竪と迂とは自力聖道のこころなり」「横超はすなわち他力真宗の本意なり」と述べられている。また「超」については『教行信証』「信巻」に、

大願清浄の報土には品位階次を云わず、一念須臾の傾に速やかに疾く无上正真道を超証す。かるがゆえに横超と曰うなり。

（『定親全』一・一四一頁、『真宗聖典』二四三頁）

とも述べられている。段階的な修道を経ることなく速やかに疾く无上仏道を超証することが横超の「超」の意味

である。

法然は『選択集』において、

夫れ速に生死を離れんと欲はば、二種の勝法の中に、且く聖道門を閣きて、選びて浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲はば、正・雑二行の中に、且く諸の雑行を抛ちて、選びて正行に帰すべし。正行を修せんと欲はば、正・助二業の中に、猶助業を傍らにして、選びて正定を専らにすべし。正定の業とは、即ち是仏の名を称するなり。称名は必ず生を得、仏の本願に依るが故に。（『真聖全』一・九九〇頁）

と述べている。法然が仏道を実修するなかで直面した課題を「速やかに生死を離れる」と示し、そしてその課題に応えるのが本願念仏の仏道であると示している。その法然の教えを承けて、親鸞は「横超」という語句を用いて浄土宗や真宗や他力を明らかにしたのである。

先述のように「横超」の「横」は「他力」を表し、「超」は「超証」を表している。この横超の仏道に関して留意すべきことが『愚禿鈔』下巻に示されている。それは「易行道　浄土門」と示された上で「横超　如来の誓願　他力なり」「横出　他力中の自力なり。定散諸行なり」（『定親全』二・二四頁、『真宗聖典』四三七～八頁）と述べられている。そこでは「横出」に簡んで「横超」が示されている。そのことによって、ただ単に他力というだけでは表し切れない課題を表そうとしている。親鸞は「他力中の自力なり」という「横出」に簡んで「横超」を明確にしようとしている。その「横出」は「定散諸行なり」と述べられている。それは直接的には『観無量寿経』に顕説される定善散善の諸行を指しているが、そのことは念仏の道においても深い問題としてある。すなわち念仏を定散の諸行として偏執していったり、あるいは定散の心によって念仏を修していったりする在り方

が、「他力中の自力なり」という「横出」として表されていると言えよう。そしてそのような「他力中の自力」「横出」に簡んで、「他力真宗の本意」「横超」としての本願念仏の一道を親鸞は明らかにしているのである。

親鸞は『末燈鈔』（第一通）で、

浄土宗のなかに、真あり仮あり。真というは、選択本願なり。仮というは、定散二善なり。選択本願は浄土真宗なり。定散二善は方便仮門なり。浄土真宗は大乗のなかの至極なり。

（『定親全』三・六二頁、『真宗聖典』六〇一頁）

と述べている。ここでは「浄土宗」についてあえて真・仮を分判している。そのことによって、法然の教えの要は、定散二善に簡ぶところの選択本願であると述べている。そしてその選択本願の仏道を「浄土真宗」と示している。

第二項　本願を憶念して自力の心を離るる――横超他力――

これまで「他力」について「横超」という言葉を用いて親鸞が何を明らかにしようとしているのかを見てきた。この他力の仏道において留意すべきことがあることを親鸞は示している。そのことは『三経往生文類』には、

この阿弥陀如来の往相回向の選択本願を、みたてまつるなり。これを難思議往生ともうす。これをこころえて、他力には義なきを義とすとしるべし。

（『定親全』三・二六～七頁、『真宗聖典』四七〇頁）

と述べられている。阿弥陀仏の選択本願による往相回向を窺ってきた親鸞は、それを難思議往生と言うのであると述べる。そしてこのことを心得た上においては「他力には義なきを義とす」ということをよく知るべきである

と述べている。このように親鸞は、他力に関して「義なきを義とす」ということを繰り返し述べている。『正像末和讃』には、

聖道門のひとはみな　自力の心をむねとして　他力不思議にいりぬれば　義なきを義とすと信知せり

（『定親全』二・一八五頁、『真宗聖典』五〇五頁）

と述べられている。聖道門は自力の心を中心としている。これに対して浄土門の他力不思議に帰入するならば自力の心・計らいがないのが本義であると信知するのである、と述べられている。ここでは聖道門に対する浄土門（他力不思議）について「義なきを義とす」が述べられている。しかし「他力中の自力」すなわち「横出」について先述したように、「義なきを義とす」とは他力のなかにおける問題としてもあるのである。『正像末和讃』で「獲得名号自然法爾」について述べられるところでは、

法爾というは、如来の御ちかいなるがゆえに。しからしむるを法爾という。この法爾は、御ちかいなりけるゆえに、すべて行者のはからいなきをもちて、このゆえに、他力には義なきを義とすとしるべきなり。…（中略）…弥陀仏は、自然のようをしらせんりょうなり。この道理をこころえつるのちには、この自然のことは、つねにさたすべきにはあらざるなり。つねに自然をさたせば、義なきを義とすということは、なお義のあるべし。これは仏智の不思議にてあるなり。

（『定親全』三・二二一～三頁、『真宗聖典』五一〇～一頁）

と述べられている。引用文の前半では「このゆえに、他力には義なきを義とすとしるべきなり」と述べられている。しかし後半においては「この自然のことは、つねにさたすべきにはあらざるなり。つねに自然をさたせば、義なきを義とすということは、なお義のあるべし」と念を押すように述べられている。それは「義なきを義と

す」と了解すること自体が「なお義のある」となっていくような義の問題があるからである。

では他力の仏道において問題として取り上げられている「義」とは何か。『御消息集』（善性本　第二通）には、

また、他力と申すことは、義なきを義とすと申すなり。義と申すことは、行者のおのおののはからう事を義とは申すなり。如来の誓願は不可思議にましますゆえに、仏と仏との御はからいなり。凡夫のはからいにあらず。

（『定親全』三・七八～九頁、『真宗聖典』五八九頁）

と述べられている。「義」とは行者（凡夫・人間）が計らうことであると示されている。そして『御消息集』（広本　第十八通）には、

また弥陀の本願を信じそうらいぬるうえには、義なきを義とすとこそ、大師聖人のおおせにてそうらえ。かように義のそうろうらんかぎりは、他力にはあらず、自力なりときこえてそうろう。（また）他力ともうすは、仏智不思議にてそうろうなるときに、煩悩具足の凡夫の無上覚のさとりをえそうろうなることをば、仏と仏とのみ御はからいなり。さらに行者のはからいにあらずそうろう。しかれば、義なきを義とすとそうろうなり。義ともうすことは、自力のひとのはからいをもうすなり。他力には、しかれば、義なきを義とすとそうろうなり。

（『定親全』三・一五六頁、『真宗聖典』五八一～二頁）

と述べられている。凡夫による計らいとは「自力」であり、それを「義」というのであると示されている。そして「弥陀の本願を信じそうらいぬるうえには、義なきを義とす」とは法然の教えであると述べられている。このような法然の教えを承けて『歎異抄』第十章には、

「念仏には無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおおせそうらいき。

（『定親全』四・一三頁、『真宗聖典』六三〇頁）

と述べられている。「義なきを義とす」とあるように、自力の計らいが雑わらないことが他力の仏道の要なのである。それゆえに他力の仏道を学ぶということは、自分の了解や見解を固めることではないし、そのようにすることによって救われると思うことでもない。逆に、学ぶことによって自分の思い込みや計らいなどの自力の心を離れていくことなのである。そのことが『教行信証』「化身土巻」には、

「横超」とは、本願を憶念して自力の心を離るる、これを「横超他力」と名づくるなり。これすなわち専の中の専、頓の中の頓、真の中の真、乗の中の一乗なり、これすなわち真宗なり。すでに「真実行」の中に顕し畢りぬ。

（『定親全』一・二九〇頁、『真宗聖典』三四一～二頁）

と述べられている。阿弥陀仏の本願を憶念して自力の心を離れていくことが「横超他力」なのである。これは専修のなかの専修であり、頓教のなかの頓教であり、真実のなかの真実であり、一乗のなかの真実の一乗である。これこそが真宗である。そしてこのことは、既に『教行信証』「行巻」において一乗海の釈義として述べられ、さらに一乗の教については四十八の対比を示し、一乗の機については十一の対比を示して顕されているのである。このように一乗のなかの真実の一乗としての真宗を親鸞は、「横超」という言葉を用いて「他力」を確かめることによって明らかにしていったのである。そして横超他力の仏道の全体は「他力と言うは、如来の本願力なり」（『定親全』一・七一頁、『真宗聖典』一九三頁）と述べられるように、阿弥陀如来の本願力によるものに他ならないのである。

おわりに

本論文は親鸞における他力の思想を「本願力」「他力」という用語に着眼して考察した。考察に際しては、親鸞の仏道の了解は浄土三部経や七祖の教えに導かれていることを念頭に置いて、「本願力」「他力」などの用語が三部経や七祖の著述に如何に述べられているかをまず取り上げた。

次に、それらを踏まえながら展開されている親鸞の他力思想を考察した。親鸞は他力を本願力回向や如来回向として顕開している。その如来回向の内実を、衆生の上に往生道を開く因としての大行と大信の行信に焦点を当てて考察した。そして如来回向とは行と信に尽きるものではなく、真実の教・行・信・証という往相の四法としてはたらくものであり、さらには還相への展開をもつものであることを確かめた。このような豊かな内実を有するのが他力の仏道であると親鸞は顕している。

本論文の最後では、他力の仏道を歩む衆生にとっての課題として示されている「他力には義なきを義とすとしるべし」（『定親全』三・二六～七頁、『真宗聖典』四七〇頁）ということを考察した。この課題を確かに受け止めながら「本願を憶念して自力の心を離るる」（『定親全』一・二九〇頁、『真宗聖典』三四一頁）ところにこそ、横超他力・真宗という仏道があることを親鸞は示しているのである。

参考文献

『真宗大系』真宗典籍刊行会編・国書刊行会発行（一九七四年）
『続真宗大系』真宗典籍刊行会編・国書刊行会発行（一九七六年）
『浄土論註講義』香月院深励著・法藏館発行（一九七三年）
『観経四帖疏講義』香月院深励著・法藏館発行（一九七五年）
『親鸞大系』信楽峻麿など監修・法藏館発行（一九八八年）
『親鸞全集』石田瑞麿訳・春秋社発行（一九八五年）

〈キーワード〉如来回向、横超、自力の心